REVENGE OF THE FENRIR

BAR　Gold drops

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＲＥＶＥＮＧＥ　ＯＦ　ＴＨＥ　ＦＥＮＲＩＲ

【Ｎコード】
Ｎ１７３５Ｖ

【作者名】
ＢＡＲ　Ｇｏｌｄ　ｄｒｏｐｓ

【あらすじ】
魔界が開かれようとしていた事件から数ヶ月、若き事務長、ルカリオのソルはある出来事をきっかけに悪魔の力を自ら封印した。己の奥底にある頼りを消すために。そして今まで使っていた武器も置いていき、新たな戦いへと身を投じた。シーズン２のリメイクであると同時にＢＬＡＣＫ　ＳＯＵＬの偽であり、もう一つの舞台が動き始める。

ミッション０：あの日から…

「ゴホ…ゴホ…」

【テメエじゃ俺に勝てねえよ！】

「なん…だと…？」

【テメエは俺に追いつけねえよ！】

「そんなこと…ある…か！！」

【テメエは鈍い。】

「…！鈍くなんかねえ！！」

【悪魔の力しか使えない奴が！】

「違う！あれはオレの力だ！」

【改良して使ってるんだろ？なら頼ってると同じだ！】

「同じじゃねえ！」

【同じだな！形質が変わらないんだからな！】

「ク…クソ…」

【もう一度言う。テメエじゃ俺に勝てねえよ！】

「なら……お前は……オレ（俺）に……」

オレにリベンジを諦めろと言うのか！？

「ウォアアアアアアア！！」

不快な夢、悪夢に浸かっていたルカリオのソルは大汗を掻いてベッドから飛び起きた。荒い息を吐いて右手の平を見る。

「お前は…オレに諦めろと言ってるのか？」

ふざけるな…オレは負けず嫌いなんだ。悪魔に対しても…天使に対しても…たとえ神に対してもだ！一度でも戦った奴に早々負けたくねえんだよオレは！！悪魔の力無しでこの借りは何時か返すからな…！

クローゼットに掛けてあったソルのいつも着ているコートとは違い、背中に×状にクロスされた固定式の赤で塗装された金属ベルトが付いた赤と黒のコートを着て大剣ダーインスレイブを背負う…かと思いきや、クローゼットの奥からすりわりネジが鍔に幾つも埋め込まれた縦幅１５８センチ、横幅２３センチ程度で溝が幾つも出来た肉厚の刀身を持つ何とも機械的な両刃剣を後ろの腰に取り付けた。ダーインスレイブはそのまま事務長室に置いていった。さらにブラッ

クエンジェルとホワイトデビルも置いて出て行った。準備をし終えたところで1階に降りていく。

「ん？ソル、やっと起きたのか…て、何だその装備！？」

ＦＥＮＲＩＲ構成員であるグライオンのベリアルがソルの服装と武装に驚いた。ソルは構成員全員に「オレは装備を絶対に変えないからな。」と、宣言していたのだが…それがどうであろうか？×状にクロスされた赤の金属ベルトを取り付けた何時ものと違う赤と黒のコートに機械的な肉厚の両刃剣だ。さらにソルの要とも言える二丁拳銃がない。そのことにソルが口を開いた。

「悪いな。当分はあれを使う気にならなくてな。」

ただならないソルの様子にベリアルは不審に思った。どうも何かが引っ掛かる…そう考えて止まない。

「……昨日からどうしたんだ？ヒャッハー！なんて全く言わないし、ハイテンションでもないし…変だぞ？」

その言葉にソルは言葉を詰まらせた。どうにも言う気が起きないのだ。右手の平を見ながらため息を吐いて再び口を開き始めた。

「それなんだけどな……」

「？どうした？」

言おうとするも、やはり言う気が起きなかった。鼻で小さく笑い、顔をベリアルに向け、ニヤリと笑っている顔をしてこの話を断念させることにした。

「やめとく。話すとバカ長いからな。」
「ええ…？」
ソルの答えにベリアルは眉を顰めた。あまりにも勝手だ。そう思うベリアルだった。ソルは仕事用の机の上に載せられた紙の中から1枚を手に取り、ペンでサインをして壁に貼り付けた。紙には”テロリストの手下を捕まえ、可能なら本部を叩け”と書いてある。
「オレは1人で依頼を受けに行く。お前達は自由にやっててくれ。」
「え、おい！」
コートを翻し、玄関の扉を開けてFENRIRからソルは出た。一方、FENRIRの屋根からはソルと瓜2つの顔立ちをし、青いコートを着て日本刀を左手に手にしたルカリオがソルを見下ろしていた。
「…貴様は、今更普通になる気か？悪魔の力を封印し、法力で戦う気か。無謀な弟だ…」
哀れむ目で見た後、そのルカリオは黒い光を発して消えていった。

REVENGE OF THE FENRIR
BLACK SOULの偽であり、もう1つの舞台。

ミッション０：あの日から…（後書き）

タイトルを変え、装備と大部分の設定も変え（一部は残してある）、元のソル達が帰ってきた！

ソル「けどな～装備を変えるってよ…しかも悪魔の力を封印して「法力」で対応って前作に無い力じゃねえか。後、これが偽の舞台ってなんだよ？」

近作からＢＬＡＣＫ　ＳＯＵＬとも合同で使うんだよ。法力に関してはＢＬＡＣＫ　ＳＯＵＬで解説します。まだそれの投稿をしてないんだけどね。偽の舞台ってのはある奴が原因で…ね。これは探検隊での事が絡んできます。

時系列だとＢＬＡＣＫ　ＳＯＵＬで探検隊、最後にこの偽の舞台、ｆｅｎｒｉｒのＲＥＶＥＮＧＥ　ＯＦ　ＴＨＥ　ＦＥＮＲＩＲになります。ＢＬＡＣＫ　ＳＯＵＬは元々ｆｅｎｒｉｒの本来あるべき世界なんだけど…「ある奴」が原因でね。以上！探検隊見てれば分かるって！

ベリアル「なあ、他の構成員は？」

それは話を進めていく後に紹介していく。前作はキャラクターごとだったけど今作からはソル中心だから。

ソル「…まあいいか。さーて、次回から…」

ソル・ベリアル・作者『レッツロック！！』

設定資料　変更世界観から事件記録まで（前書き）

著者はルカリオのアマテラスがお送りします。

設定資料　変更世界観から事件記録まで

今作になってから世界観は大きく変わる。事件等の出来事はそのまま引き継ぐが、人物の個人能力一部設定の変更などによってこれは新しい作品と言ってもおかしくない。
新たな敵勢力の出現、対人の増加。悪魔との戦闘数低下など。今作は主に人（ポケモン）対　人（ポケモン）や新たな敵勢力との戦闘が多く描写される。またシーズン1のような滅茶苦茶な火力はある程度抑えられ、特に主人公のソルは法力と呼ばれるものを使う。悪魔の力を封印したため、火力は大幅に下がっている…はずだ。強めであるが、人並みとなった彼が多く活躍することだろう。ではここで世界観の変更点、追加点を改めて記載する。

変更点1：主要人物の優先化
今作はシーズン1のようにランダム指定されたキャラクターの視点ではなく、主人公であるソルがメインの視点となる。そのためシーズン1からいた者は登場が少なめである。そもそも今作はソルの新たな動きと変化がテーマのシーズン2リメイクのためである。

変更点2：敵の種類の分別、複雑化
シーズン1にいた両腕両足が赤と灰で染まったポケモンのことを悪魔と呼称していたが、今作からはシーズン2リメイク前の時と同じく「半悪魔」と呼称する。また、今作からなぜ半悪魔の発生が起こるのか、その詳細も物語で明らかにされる。
本物の悪魔も少量ではあるが、新たに参戦する。
さらに物語の序盤から新たな新勢力が加わる。今作ではこちらと対人に顔を突っ込むことが多くなる。

変更点3：キャラクターの火力、能力低下と変更

１話を素早く終わらせないために、一部キャラクターの能力の変更を施した。主な人物はこの通り。

ソル　悪魔の力を封印しているため、半不死身ではなくなる。一度でも致死量の攻撃を受ければその分の代償を受けることとなる。生命力はそれでも凄まじいが結局は人並みに弱体化。地形など広い範囲を破壊する力は無くなる。ただし、常人から見ればもの凄い怪力というのは変わらない。これは悪魔の力により、元から備わってしまった体質の為である。

ベリアル　破壊光線３連発射技”トリプルデスカノン”の有効、攻撃範囲の縮小。ハサミ能力の変更。

エグバード　特殊能力ヨルムンガンドを武器に変更。よって自身に特殊能力は無しとなる。

変更点４：ｆｅｎｒｉｒの表記をＦＥＮＲＩＲに変更　そしてＦＥＮＲＩＲの総合戦闘力の低下

変更点５：金銭の単位をポケから円に変更。

以上が今作の変更点。次は追加点だ。

追加点１（兼　変更点６）：悪魔関連と系統の整理　能力低下

半悪魔　両腕両足が赤と灰で染まっている状態のポケモン。極度の発狂状態や悪質な大量殺害を起こすとこの状態になる可能性がある。平たく言えば正気を失った状態。また特殊な魔術を掛けられたりす

るとこの状態になる。身体能力が全体的に上がっている。別作品”ポケモン不思議のダンジョン　半魔界の探検隊～蒼（碧）の波導の悪魔～　”にも状態がよく似ている半悪魔がいる。関連がある？

魔人　悪魔の力を有するポケモン。契約や生まれつき、突然の開花など理由は様々。急所を深く攻撃されない限りは数回ぐらいどこかを切断されても黒い霧になって復活可能。身体能力の上昇と稀に特殊能力の開花などメリットがある。色に変わりはない。希少種で魔帝というものがある。この魔帝には普通の攻撃では一切効かなく、何１００回とやられても死なない無限の耐久力を持つ。復活の仕方は黒い霧ではなく、赤黒いオーラで瞬時に復活する。一日で国１つや２つを消すことのできる能力も有することができる。ただし固体数は何百兆にか１人か２人くらいの数。魔帝までくると効く能力や術は「ソウルイーター」か「法力」くらいしか無い。今作では法力に対して弱くなっているよう変更されている。

悪魔　今回から正式に決まったポケモンでない異形の存在。または異端の存在。奴らは多様である。主に罪によるものや思念によるものが多い。

追加点２：法力という新たな力
ＢＬＡＣＫ　ＳＯＵＬで載せる予定であったが、文章の執筆速度低下により、先にこちらで法力に関することを載せる。

法力とは元々、仏法の修行を受け続けた者に宿る非科学の力。しかし、この世界での法力は特殊な素質を持つ、または理解できる才能を持つ人物に宿る非科学の力。この法力が扱える者のことを”法力使い”と呼ぶ。法力には他の能力とは違い、魔に対する破魔能力を持っているため、悪魔や魔人に対して有効なダメージを与えられる。

属性基準もあり…火、水、雷、風、地、この五種類の”５大属性”に基準外の暗黒がある。

火の法力は主に自身に対して自己攻撃能力を一時的に高め、相手に対しては炎による広い攻撃範囲と高い確率で燃焼効果をもたらす。非常に扱い易くオードソックスな法力と言える。

水の法力は自身に対して物理攻撃を受けない体に変化させ、相手に対しては水をぶつけることで動きを鈍らせることができ、温度を変化させることによって水蒸気や氷を生み出したりと、何時でも利用できる多彩な戦略を組み立てることができる。扱うには液体の変化を観察して理解をするように、形態変化に対して多少のコツがいる。

雷の法力は自身に対して雷を纏わせることによって脅威的なスピードを生み出し、相手に対しては電撃を当てることによって体を痺れさせることができる。基本５属性の中で一番扱い難い法力でもある。

風の法力は自身に対して浮遊効果をもたらし、相手に対しては一定量の風を浴びせることによってノックバック効果を与えられる。また、風力を活かして相手の動きを制限することも可能。火の次に扱い易い法力である。

地の法力は自身に対して総合防御力を高め、相手に対しては攻撃を加えることによって疲れを倍増させることができ、さらに身体を蝕む毒効果も追加で与える。雷の次に扱い難い法力である。

これら５種類に対して暗黒の法力は能力が個人により不規則で、効果や形状なども異なる。これだけ能力が固定されていない特殊な法力である。

追加点３：新勢力（新手）の介入
先程にも載せられたように、今作ではこの新勢力と衝突することとなる。

今のところ、これが追加点である。最後に事件記録を載せておく。
これは物語に繋がるのでよく見ておいた方がよい。

ミッション０：便利屋ＦＥＮＲＩＲの物語が始まる。

ミッション１：イリス村をルカリオのソルとグライオンのベリアル、ソルと同じく、ルカリオのアマテラスで盗賊団から奪還。

ミッション２：アマテラスとジュプトルのエグバード、マグマラシのエレンがカービス高速道路で半悪魔と対峙。

ミッション３：ソルとベリアルでエルフーンのマレア＝ラジスをラジス邸宅まで護衛。

ミッション４：エグバードとソルでマガリットシティへ。そこでソルの孤児院の神父であり、施設悪魔討伐組織”ジュワユーズ”に所属しているゾロアークのウラヌスと遭遇、共同して依頼を完遂。

ミッション５：大きなことは起きてないため省く。

ミッション６：アマテラスとエレン、ベリアルで無人島に潜む半悪魔と殺人鬼と対峙。冒頭でエグバードの過去描写が有り。内容から察するに別作品”荒野の戦士達”のエグバードと同一人物？

ミッション７：ＦＥＮＲＩＲがジュワユーズと協力をする。

ミッション８：ソルとアマテラス、ウラヌスで遺跡の調査をする。奥で何かを施していたバシャーモのクライドをソルが惨殺。

ミッション９：エグバードとカメックスのブリンスト、ベリアルとエレンで洋館を探索。

ミッション１０：冒頭でエレンの実父であるバクフーンのギルガメスが登場。しかし正体を言わずにその場から去る。ソルの銃が大破し、ソルとベリアルで銃器店”オールベリーマッチ”で改造兼、修理をしに行く。そこで孤児院の頃のライバル存在、ゴウカザルであり、ガンスミスとなったナトと再会。

ミッション１１：ソルとウラヌス、エレンで廃ビルへと向かう。シーズン１のラスボス存在、ダーテングのシドがエレンを狙おうと迫り来るがソルに妨害される。ビルから脱出した際、実母であるバクフーンのマスティマと会い、ギルガメスと再会する。

ミッション１２：この時を境にマスティマとギルガメスがＦＥＮＲＩＲに新たに加わる。

ミッション１３：アマテラスとエグバード、ブリンストとギルガメスで蒸気機関車へ乗車する。アマテラスはトラウマに浸かっていた最中、ベイリーフのバラデュール＝アントワネットから説教を受ける。その後は迫ってきた狂信者？と対峙。

ミッション１４：アラタ・ハイドさん（現在のイヴさん）とのコラボ話※重要

ソルとエレン、ベリアルとマスティマで洞窟へ向かう道中、別世界から来たツタージャの三原ツカサと遭遇。バグと呼ばれる未知の生物を倒す組織にいる者であった。その中でツカサは相当の実力の持ち主である。一方のバグはシドの手によって呼び出され、悪魔化した劣化バグ”エクトズムインフェス”を洞窟内に大量放出。それを５人が完全排除。ツカサはシドの作り出した魔法陣によって元の世界に帰っていった。

ミッション１５：１６までフォックさん（現在のフォック・リザハートさん）とのコラボ話が続く※重要
ソルとウラヌス、道中から加わったギルガメスとマスティマに、シドによって異世界から強制的に呼び出された作者方であるフォックと、同じくからシドに呼び出された探検隊なる者のドダイトスのドルクと相棒のゴウカザルのシルムで大手商業会社ラプトルへ進入していく。この時、悪魔と遭遇をする。

ミッション１６：異世界でソルとドルク、シルムはシドと対峙。見事撃破を果たす。シドはその後、ギルガメスとマスティマによって冥界へ投げ捨てられる。戦いが終わってからの後、ソルとドルクはお互い怪しい同盟を組んだ。

ミッション１７：新たな激動への向けてのシーズン１終了話。

ミッション？：アラタ・ハイドさんとのコラボ※重要
ソルが出張で別世界へ向かう。そこから変化が起きた。

ミッション？？：ソルが別世界から帰還。しかし前回の出張により、精神に異変が起きた。

シーズン２リメイクのＲＥＶＥＮＧＥ　ＯＦ　ＴＨＥ　ＦＥＮＲＩ

Ｒ　ミッション０：ソルが精神の異変により、今までの能力と武装を外す。悪魔の力は封印し、コートを着替えする。二丁拳銃を置いていき、大剣ダーインスレイブを機械のような肉厚の両刃剣に持ち替える。

設定資料　変更世界観から事件記録まで（後書き）

これが今回の変更世界観と事件記録だ。以上。

著者：アマテラス　編集：ハボック

ミッション1：早々の喧嘩事

「さてと、まずはどこから行くか。」
「よお兄ちゃん。ちょっと面貸してくんない？」
「……」

便利屋ＦＥＮＲＩＲから出て早々、ソルはガラの悪い輩に絡まれていた。鉄パイプを持ったゴーリキーが明らかに相手を脅す声を出してこちらに呼び込もうとする。そのゴーリキーにソルは僅かに笑い、場違いなことを言い出した。

「こんな真昼間の路地裏にいると、悪い人に捕まっちまうぞ？」
「ああん？何言ってんだコイツ？」

ソルの言ったことにゴーリキーの仲間であろう、ハブネークが声を上げる。それで周りの仲間も一緒になって笑い出す。だが、逆にソルは「気の毒にな…」と思い、口を三日月のように裂かせていた。

（バカが。もうちっと大人しくしてりゃあ「テロリスト」として活動できたのにな…）

「だーから捕まるって…」
「へ？」

瞬間、ハブネークは機械のような剣に殴られ、体を跳ね飛ばされていた。ソルは依頼の紙にこの連中の顔が写っているのを見ていた。よって彼らはテロリスト、組織の手下である。道路へ放り飛ばされたハブネークは遠くで気絶している。ハブネークを跳ね飛ばしたソルは右手で機械のような剣の柄を握り、笑っていた。

「教えてやっただろ？悪い人に捕まるってな。」
「な、何だコイツ！？お前ら、さっさと片付けるぞ！」
次々と虫のように群がって襲い掛かってくるテロリストの手下に対し、ソルは蹴りで間合いを無理矢理開けさせ、右手の機械のような剣を唾の部分で相手を殴りと、とにかく大暴れであった。
「剣を持ってるくせに蹴って殴ってばっかりいやがって！」
「斬られたいのか？じゃあ斬ってやるよ！」
襲い掛かってきたゴーリキーに対して腹を目掛けて横に剣を振るう。
「ちっ…！」
ゴーリキーは直前で鉄パイプでガードを行うが…
「消し炭になれ！」
ソルが柄を強く捻り、剣の溝から超高温の炎が噴出した。鉄パイプを一瞬にして赤熱させ、燃え盛る炎がゴーリキーを焼き尽くす！
「ぐおわあああああ！」
「んだよあの剣！？」
「剣に燃料をブチ込んでるだけだ。」
火だるまになっているゴーリキーに目を止めず、燃え盛るあの剣に目を止めていた。ソルの手にしてる剣に手下は驚きを隠せなかった。剣をよく見ると溝には肉眼ではよく見えない極小サイズの噴出口がある。ここから炎が出ている仕組みになっているようだ。しかし、

いくら燃料を入れていると言っても鉄パイプを一瞬で赤熱させるまでの温度は出るものなのか？当然、ただの炎では燃料でそこまで出ない。そこでソルは「法力」を使い、底上げをしていた。だが、その力は自身に宿す悪魔の力により、使う度に微弱ではあるが体を蝕むこととなる。

「どうしたよ？いきなり怖気づきやがって。焼かれるのが嫌になったか？降参して情報渡すなら焼くのは勘弁してやるよ。」

「…舐めやがって！」

ソルの挑発に拳銃を手にしたベロリンガがトリガーを引こうとした。その際、ソルは近くで倒れて火だるまになっていた鉄パイプを手にしていたゴーリキーを掴み上げ、盾にした。

「さあどうするよ？引き金を引くか？」

「関係ねえな！」

仲間に容赦なくトリガーを引こうとしたその時、アクシデントが起きた。

「そこのお前ら！何やってるんだ！」

「ゲッ！武装警察に嗅ぎつけられたか！」

「ク…クソ！逃げるぞ！！」

警察のバッジを槍の柄に付け、それを手にしているカイリューを見た手下達は声を上げて一目散に逃げていった。突然の介入にソルは舌打ちをして火だるまになっていたゴーリキーを乱暴に投げ捨てた。命はまだあるものの、仮死状態である。そんな状態のゴーリキーを見てカイリューは鋭い眼をソルに向けた。

「これはお前がやったのか？」

普通だったら「テロリストを攻撃していただけだ。」とか「オレがやったがそれには理由がある。」など言うはずだ。だが、ソルは思いがけない行動をした。

「だったらどうするよ？」

そう言って剣の刃先をカイリューに向けた。刃先を向けるということは相手に対して攻撃意思を示すことと同じだ。刃先を向けられたことにカイリューは敵と判断し、槍を向ける。

「武力行使をもって拘束し、その後取り調べをする。抵抗はするなよ…」

「武力行使か。面白いじゃねえか！」

（火の法力なんざ久々に使うんだ。本当なら暗黒を使うはずなんだがな…ま、リハビリとして相手してもらうぜ。警察のカイリューさんよ…）

ソルは法力に慣れるためとリハビリ目的のためにワザと嘘を吐いたのだ。事実を知らないカイリューは不幸にもソルに槍の先端を向け、翼を羽ばたかせる時の推進力を使って突撃した。

「セイ！」

曲線を描く突きが迫るが、ソルは冷静に対処した。曲線の突きに対して下から剣を突き上げながら横払いをして突きの軌道を逸らす。突き上げた時の運動力を活かし体の腰を捻り、足の指先のバネを利用して小さくジャンプする。この勢いをさらに利用し、左手でカイ

リューの腹を法力の炎で纏った拳で殴りつける。
「ガハッ…！」
「おいおい、こんなもんかよ。」
左手の殴りつけに体を曲げ、腹を押さえながら後ろに後退した。一撃でこの様子を見たソルはため息を吐いて剣を後ろ腰に取り付けた。興味無しとでも言うような対応だ。
「あーあ……公共の戦士が一撃、しかも炎で落ちるのかよ。やってられねえ。」
「ま、まだ終わってないぞ！」
「いや、終わった。剣持ってる奴にぶん殴られてる時点でアウトだっつーの。」
「グッ……」
カイリューとソルの実力の差は大きかった。カイリューの実力は高いほうではあるのだが、ソルはそのカイリュウーよりさらに上回っている。ソルの発言は圧倒的な強者であるが故の言葉であった。事実のことにカイリューは反論できず、黙り込んだ。
「いい事教えといてやる。こことあそこでぶっ倒れてるゴーリキーとハブネークだが、アイツはテロ組織の手下だ。アイツらから情報を聞き出そうとしたんだが…お前が来たせいで逃げられたんだよな。気絶した連中は使えないしよ…ま、後でとっ捕まえるからいいけどな。んじゃ、オレはこれで退散するぞ。テロ組織の本部をぶっ壊さないといけないんでな。」
「それは本当なのか？」
「取調べをすればいいじゃねえか。当然、オレは免除してくれるよな？勝負にも負けたんだしよ。」

ソルの要求を聞いたカイリューは仕方ないと槍を背負い、ゴーリキーを持ち上げて引き摺っていった。

「……次に警察へ公務の妨害をしたら捕まえるからな…」

「たぶん妨害はしねえよ。たぶんな。」

その言葉を聞いてソルは路地裏から出て行った。後に残ったものはカイリューと焼け焦げた壁、ドロドロに赤熱している物であった。

「それにしてもあのルカリオ、手から炎が出ていたな。…”炎のパンチ”に酷似していたが何か違うな。それ以前に使えないはず……一体何者だ？」

ソルのあの時使っていた力、法力に対してカイリューは疑問を抱くのだった。

ミッション1：早々の喧嘩事（後書き）

ソルの使用法力は火と暗黒と判明。ただし暗黒は諸事情で使わない模様。

ソル「暗黒はなぁ…」

暗黒だからね。さて、何かモッサリした文になっちゃったけど今回はこれで許してください…

ミッション2：BARにて&半悪魔？来襲（前書き）

この先、ずっとアクシデントのターン！

ソル「テメエなあ…」

ちょ、機械の剣向けんな…アーッ！

ソル「こんがり焼けてろ…」

ミッション2：BARにて&半悪魔？来襲

「コイツらを見なかったか？」

ソルは現在BARでテロリストの情報収集を行っている。昼間であるにも関わらず、薄暗いこの店内はならず者がよく集まる集会所と化している。今も隣りの席では酒で酔っているガラの悪いエルレイドがいる。当然、他の席でも似たような者が多くいる。中では本当にこっそり危ない物を取引している者達も…

見かけはしたが、今はどうでもよかったので無視をしていた。こんな中でも情報収集をするには最適の場。何故ならマスターは顔をよく覚えているからだ。そこでマスターの力を借りて写真に写っているテロリストのメンバーを見なかったかを確認していた。この問いに女性マスターのコジョンドが快く答えるように淡々と話し始めた。

「この方達はこの店の常連ですね。何か関係があるのですか？」

「こいつらはテロリスト、その部下だ。あんたの場合、前々から知っていそうだけどな。」

「とんでもございません。私はあくまで「お客様」として迎えていただけでございます。」

要は知ってるんじゃねえかよあんた…客としてなら誰でも有りかよ。ついで未成年のオレも「客」ならいいってか…なんか飲まねえとな……

マスターの対応とルールに圧倒され、不本意であるが何か飲むことにした。ソル自身、酒が飲めないことはないが味的に好みでないのだ。そのため飲む量は最小限に抑えつつ、アルコール量の少ない酒

を注文することにした。が、いちいち選ぶのが面倒なため、オススメの看板にある酒を注文した。それが選択の間違いだというに…

「え～と…スクリュードライバーとかってやつで。」

「ほう？これはまたインパクトのあるものを…」

マスターが不適な笑みを浮かべて見つめてきたことに不安が全身を巡った。

（まさか選択を間違えた？オレが？て、ウォイ…ちょっと待て。今思い出したがスクリュードライバーって確か…！）

説明しよう。スクリュードライバーとは決してプロレス技ではない。ウォッカをベースとするカクテルの一つである。　またウォッカは基本的には無味とされている。そのためアルコール度数の変更が非常に容易なカクテルである。そして口当たりが良い割りにアルコールの度数が高いことも知られている。これで女性に良からぬことをする輩のせいで”レディーキラー”などと言う異名で呼ばれることもしばしばである。

ということはだ。ソルは見事に選択を間違えたのだ。アルコール自体に耐性が強いが、酒、つまりアルコールはとにかく好きではないのだ。にも関わらずアルコール度数の高いスクリュードライバーを注文してしまった。選択を間違えたと肘をついて頭を抱込んだ。

「おや、どうかなされましたか？」

「いや何でもねえ…それより早く頼む……」

「うふふ…かしこまりました。」

口元に手を当てながら優雅に笑みを浮かべた。周りの男集は「オォ

〜！」と歓声が湧いたがソルは全く歓声を上げない。むしろ口を開けたまま首を８５度曲げている。

ちくしょう…酒は好きじゃねえんだよ……泣ける展開もいい加減にしろよ。つーかあのマスターのどこがいいんだかオレには分からん。『お姫様』のほうが断然いいだろうが……

一瞬、脳裏にガミガミと説教をこちらにしてきているエーフィの少女の姿が浮かんだ。懐かしく幼い記憶を思い出しながら、肘を付いてため息を吐いた。思い出したら急に疲れが出てきたからだ。

（イブのやつ…どうしてるんだかな…いい彼氏はちゃんと出来たんだろうか……まだオレを想っているんだろうか……ナトはあそこで元気にしてるんだけどな…）

「スクリュードライバーです。」

「ん？ああ。」

グラスに注がれたスクリュードライバーを一気に流し込んで気持ちを切り替えた。自身の性に合わないがためのイライラから来たからだ。先ほどまでのソルの変わった様子にマスターが気づき、弱点を当てた。

「幼い記憶でも思い出していたのでしょう？」

「…なんで分かった？」

「その目で分かりますよ。誰かを心配に想う遠い瞳。昔を懐かしむ顔。全て当てはまっていますからね。」

「細かいな、オイ……」

「マスターの眼を見くびっては困ります♪」

（そりゃあ恐ろしい能力だこと…）

心で皮肉を込めた台詞を呟き、財布から代金を払おうと手を入れようとした時にドアが開き、外から見るからにガラの悪いライボルトとドグロッグが大笑いをしながら入店してきた。ソルは2人を見て手がピクリと動いた。

（手下どもじゃねえか。ラッキー…自分から来やがった！んじゃあちょいと拷問して居場所吐かせるか…）

外へ連れ出そうと手を広げた時にドグロッグとライボルトが後ろから来た人影に外へ飛ばされていった。人影の正体は先ほどまで酔っていたガラの悪いエルレイドだ。

「何だ？あいつらと因果関係でもあるのか？つーかマスター、止めないのか？」

彼らは客なのだからエルレイドのたった今に行った暴行を阻止するはずだ。しかし返ってきた答えは実に残酷であった。

「店内でなければお客様とは見なしません。」

「……すげえ鬼だな。」

あんたのその鬼っぷりはすげえなオイ。賞賛に値するじゃねえか。

哀れテロリストの手下。客は店内でなければ見なさない鬼畜ぶりはまるで「城に踏み入れるな下衆め。」というような女王だ。ソルとマスターが傍観する中、エルレイドは目を大きく見開かせたままド

グロッグにサイコカッター至近距離で飛ばし続けている。ライボルトの方は気絶をしてその場に横たわっていた。攻撃に夢中のエルレイドは酔いを忘れさせるようなキレのある動きでサイコカッターを飛ばし続けた。

「貴様…貴様！！絶対に許さん！！我らのドンをよくも！！」

「ちょ、待て…！落ち着け！」

サイコカッターを当て続けられているドグロッグは薄れる意識の中、攻撃を止めさせようと話しかけるがお構いなしにサイコカッターを当て続けてくる。この様子を見てソルはため息を吐きながら愚痴を漏らした。

「面倒事がよく起こる日だな。」

手がかりを逃すまいと前に前に進み出る。それを見たマスターがこちらに聞いてきた。

「止めに行くのですか？」

「当たり前だ。手がかりを殺されてたまるかよ。」

機械の剣に手を掛けてエルレイドの手を掴み上げた。エルレイドが瞳孔を開かせた状態で睨みつけるがソルは鼻で笑い、全く動じなかった。

「何だよその眼は？立派な殺人鬼じゃねえか。」

「放せぇ！！貴様も殺されたいか！！」

激しい怒りの篭った言葉にソルは眼を鋭くさせてドスのある声を出した。

「そっちこそ殺されてえか？いいか、そいつらは今ここで死なれちゃ困るんだよ。殺すなら後にしろ。」
「待てるか！！サイコキネシス！！」

不意をついてサイコキネシスを浴びせてきた。この距離で避けることはほぼ不可能だ。しかしそれならばこちらも攻撃で対抗してしまえばいい。負けずまいと相手と同じ技を発動する。

「サイコキネシス！」

ソルとエルレイド、両者とも同じ技ではあるが威力に差があった。ソルの方が圧倒的で、エルレイドのサイコキネシスを打ち破った。ソルのサイコキネシスから発せられる拘束エネルギーに体を押さえつけられ、動きが取れなくなった。

「ほれ。」
「ゴハッ！」

左腕を下ろされたと同時に体を地面に叩きつけられた。拘束が解かれて立ち上がろうとするが、ソルに頭を踏んづけられて立ち上がれなくなった。必死にもがくがそれは空しく終わった。

「うるせえから寝てろ！このマジ切れ野郎が。」

踵落としを頭にくらい、ここで意識が保てなくなって倒れた。

「たく、面倒くせえこと起こしやがって。」
「た、助かったぜあんちゃん…」

所々切り傷で出血を起こしているドグロッグが歩み寄って来たが、首を炎で形成した五本指の手で体ごと持ち上げた。非常に熱いらしく醜い悲鳴を上げるが、ソルは容赦なくドS気たっぷりの声を発した。

「オイ、テロリスト下っ端～オレは正直テメエらなんざ知ったこっちゃねえ。だがそっちが本部の居場所を教えてくれないと殺そうにも殺せないんだよな～。教えてくれねえかな～？あ、居場所吐くなら早めにな。でないとミキサーのように足からこのVW（ヴォルルユック）で刻んでくぞ…」

剣の名を口にしながら右手に持つ機械の剣、VWの刃先をドグロッグの足先に付ける。何時でも斬れる体勢に入っていてドグロッグに逃げ場は無かった。ソルの目的は自白の道へ行かせること。そのためには精神を責める言葉と残酷性のある拷問が必要となる。今回ソルが行おうとする拷問は足からミキサーのように刻むという聞いただけでも恐ろしい内容である。

「わ、分かった！話す！だから命は奪わないでくれ！それと手を離してくれ！」

拷問の内容と現在受けている首絞めに屈してとうとう居場所を吐くこととなった……

「さてと…本部に着いた訳だが……何でお前まで来るんだよ。」
「貴様には関係ない。ドンの仇が貴様の相手と一緒なだけだ。」
ドグロッグに自白をさせて居場所を聞き、辿り着いたのが瓦礫だらけのスラム街、ハングリッドシティの廃墟に来た訳であるが、自白が丁度終わった際にエルレイドが気絶から回復して起き上がり、さらに内容をある程度聞かれていた。結果がこの様である。
「オイ、先に言っとくが邪魔するなよ？」
「私の台詞だ…」
ソルが頭を掻きながら言い、エルレイドが腕を組みながら言った。お互い相性はあまり良くないようだ。しかしこのままだと仕事に支障をきたしそうなため、少しでも有効関係を作ろうとソルが自己紹介をした。
「一応自己紹介しとくか。オレはソル＝ネファステュリスだ。」
「…くだらない。……ルシー＝ベルナドットだ。馴れ合うつもりはないぞ。」
「馴れなくて結構。それにオレにはお姫様がいるんでな。」
「自慢のつもりか？」
「しちゃ悪いか？」
自己紹介をした結果、何時の間にかいがみ合っていた。そんな2人に廃墟のドアから両腕両足が赤と濃い灰で染まったストライクが現れ、こちらに近づいてきた。
「あいつは…」
「何だ？知り合いなのか？妙なタトゥーを入れているな。」

「違うな。それより死にたくなければ構えろ。」

ストライクの姿を見たソルがＶＷに手を掛けて姿勢を低くする。ソルの鋭い声にルシーも腰に下げていた長剣を鞘から抜いた。両腕両足が赤と濃い灰で染まったポケモンは半悪魔と呼ばれる、言わば正気を失ってリミッターが外れている者である。理性を失っているのと言葉を話さず、両腕両足が赤と濃い灰で染まっているのが一番特徴的である。そのためすぐに襲い掛かってくるはずなのだが、何故かこの半悪魔はすぐに襲い掛かってこない。そのことにソルが眉を顰めて斬りかかろうとした瞬間、戦慄が全身を巡った。

「やあ、殺し屋諸君。」

半悪魔と化しているストライクがなんと言葉を話した。そのことにソルは動揺した。

「……なに？」

何だこれは…一体どうなってやがる。半悪魔が言葉を話すだと？冗談じゃねえ。しかも落ち着いてやがる…

目に映るストライクは微笑を浮かべて腕を刃を重ねて研ぎ、鳴らしていた。

ミッション2：BARにて&半悪魔？来襲（後書き）

ＢＬＡＣＫ　ＳＯＵＬでも敵役として出演のルシーが登場。名字はベルナドットでした。

ソル「おい、それより半悪魔が言葉を話すって一体どういうこった？」

次回ではまだ分からないと思う。

そして次回は目指せ！ＳＳＳ（スモレヤスタイリッシュ）ランク！！

ルシー（リベンジ）「……私のことあれだけか？」

ミッション３：殺し屋（便利屋）　ＶＳ　ＴＡＫＡＨＡＳＩ（前書き）

戦闘ＢＧＭはマトリックスリローデッドのネオＶＳスミス軍団で。

ソル「スタイリッシュに決められなかったら焼くからな。」

ルシー（リベンジ）「しっかり書くのだぞ。」

プレッシャー掛かるなオイ…

ミッション3：殺し屋（便利屋）　VS　TAKAHASI

カラスが廃墟に鳴き声を響かせる。空は雲っているが、少し暗く感じる。異様な空間と化した中、ストライクは微笑を浮かべてこちらに近づく。腕の刃を擦り合わせて鳴らし、口を開いた。

「ふうん…ヒューマン（ポケモン）とはとても残念な生き物だ。」

「差別用語使うなんてよっぽど残念なのか？」

ストライクの言った内容にソルが問いを投げかけた。ここでのヒューマンとは主に悪魔の力を手にしたポケモンの「魔人」が普通のポケモンに対してに言う差別用語である。ソルの問いにストライクは「そうとも。とても残念な生き物だ。」と腕を上げながら答えた。

「とてもとても残念だ。対した力もない。弱者の立場の割に傲慢を言い放つ。そして脆弱で貪欲な生き物…はぁ～とても残念だよ。我々より崩れやすい者達だ。もっと貪欲に汚くなりたまえ。半端な量では楽しめもしない。あぁ、とても残念だ。」

「残念残念うるせえよ、ＺＡＮ☆ＮＥＮ☆ＭＡＮ☆そんなに講義したいなら賑やかな街に行ってやりやがれ。ルシーお前も何か言えよ。」

話す相手が面倒になったため、ルシーに振るが、「言う言葉などない。」と言ってすぐに振り返された。ストライクはこの光景を見てまた残念だと言った。青筋を浮かせたソルが怒りの込めた声でストライクに向けて言う。

「回りくどい話は無しにしろ。オレ達に用があるならさっさと言え。」

「そうか。では言うとしよう。殺し屋諸君にはここで我々の仲間入りをしてもらおう。」

ストライクがその言葉を言った途端、廃墟のドアから赤と濃い灰で染まったポケモン、半悪魔と化したダゲキとバシャーモ、バンギラスが出てきた。しかもその全員が落ち着いた足取りでこちらに来る。

「我々は君だ。」

バンギラスが言い放ち、

「君は我々だ。」

次にバシャーモが腕を組みながら言い、

「そして全てが我々だ。」

最後にダゲキが言い終えた瞬間に右ストレートをしてきたのに反応し、VWの腹で防御した。ルシーもストライクがシザークロスをして突進してきたのに反応し、サイコキネシスを発動して動きを止める。だが、ストライクはサイコキネシスで身動きが取れないはずであったが、力押しで少しずつ前進を始めた。

「くっ！こいつ強い！」

サイコキネシスの力を強めるがストライクは尚も前進を止めない。微笑を浮かべた顔が少しずつ近づいてくる。腕の刃が鼻先にまで来た時、ソルが横からストライクに炎を纏った拳で顔の側面を殴りつけた。衝撃波が出るほどの威力であり、相手の体を宙に舞わせた。

「お前は技に技で対抗するな。力押しでも対抗するな。経験と実力だけで戦え！連中に基本能力で勝とうなんて無謀なんだよ！オラァ！！」

ルシーに半悪魔との戦闘アドバイスをしている最中にバンギラスが横から殴りかかってきたのを左手で受け止め、腹に膝蹴りを入れながら体を回転させてＶＷを逆手で力任せに振り下ろした。だが、バンギラスは目にとも留まらない速さでバックステップをして避けた。

「何だあの速度は…？つっ！」

ルシーが余所見をしている間にダゲキがインファイトを繰り出してきた。神経を最大限に集中させ、鋼の如く硬化して繰り出される拳のラッシュを剣さばきで全て弾いていく。

「そこを貰った。残念だ。」

遠くに飛ばされていたストライクが腕を刃を曲線を描いて横から振るい、腹を切り裂こうとする。

「避ける！」

刃が当たる直前でテレポートをして場所を移動して直撃を避けた。距離は離れているが油断はできない。ダゲキとストライクが猛スピードでこちらに向かって来ているのだ。刃を再び交えるのに１秒も掛からなかった。

「バンギラスが速すぎるのはシュールな光景だなオイ！」

サイコキネシスでバンギラスを捕らえようとするも、視界に映るより早く動くため捕らえられない。さらにそうしようとしている間にバシャーモがブレイズキックをこちらに向けて連続で繰り出してくるのだ。サイコキネシスを発動する暇すらない。バンギラスの威力の込められたメガトンパンチを炎を纏った左手の拳で殴りつけて相殺する。

「ガンインパクト！」

拳に纏っていた炎が突如、爆発を起こして衝撃を直接ぶつけた。衝撃を直にくらったバンギラスは地面を削りながら廃墟の瓦礫に激突した。攻撃をし終えた瞬間にバシャーモの炎のパンチが横っ腹に迫りくるのを左目で確認し、体を無理矢理捻って避ける。

「黙ってろォ！」

捻らせた体を足先で小さくジャンプをして体を空中でさらに回転させた。この勢いを利用して逆手斬りをバシャーモの脳天を目掛けて振り下ろす。しかし、相手も半悪魔でリミッターが外されている。動きに素早く反応して真剣白刃取りをして刃を取り押さえる。

「鈍いんだよ！」

逆手斬りの一撃を止められたソルは足払い蹴りと膝蹴りをくらわせた後に両手で”はどうだん”２発を至近距離で当てる。バシャーモの体は空高くへ投げ出され、６秒後くらいに地面に激突した。

「ヌゥォオオ！」

激突後のダメージから復帰したバンギラスが雄叫びを上げて高くジ

ャンプし、踏みつけようとする。

「ウォラァァア！」

踏みつけてこようとするバンギラスに膝を大きく曲げてジャンプし、アッパーキックで顎を蹴り上げる。ＶＷの水平斬りを腹に浴びせた直後に”神速”で地面に叩きつける。トドメに神速をして威力の増した踵落としを斬りつけた腹に向けてくらわせる。バンギラスは体をくの字に曲げた後に体を広げて倒れ、それっきり動かなくなった。

「まず１体！」

倒して安心している最中にバシャーモが再び接近してきているのを見て攻撃態勢を再び取った。

「ちぃ！」

「悪戦苦闘かね？とても残念だ。」

一方ルシーは悪戦苦闘を強いられていた。ダゲキのインファイトを全て剣さばきで弾いた時点で実力は高いのだが、相手は半悪魔…それも言葉も話す上、通常のようにがむしゃらな突進をせずに動きをよく見て戦う新しいタイプだ。加えてリミッターが外されており、パワーもスピードも桁違いなのだ。避けること自体難しい。連続で繰り出してくるシザークロスを弾きながら空いた左手でサイコカッターを真横から来たダゲキに飛ばす。が、ダゲキは拳でサイコカッターを軽く弾いた。舌打ちをしてテレポートをし、離れた距離からサイコキネシスをストライクとダゲキに浴びせた。

「落ちろォ！」

両腕を振り上げた後に振り下ろし、地面に叩きつける。両者ともエスパータイプの技に弱いため、これで少しはダメージが与えられるかと思ったが、相手は何事も無かったかのように立ち上がって接近を始めた。

「くっ…！」

苦々しい表情をして長剣を構え、相手の攻撃を見切ろうと眼を鋭くさせた時、ストライクとダゲキの真横からバシャーモが飛ばされてきた。ストライクは何事も無かったかのようにバシャーモを弾いた。飛ばされてきたその先にはＶＷをストライクとダゲキに振る動作をしたソルがいた。

「遅えんだよお前。フレイムポール！」

ストライクとダゲキの一定距離の空中に、ＶＷから２つの火花が発生した。さらにストライクとダゲキが動くより早くに火花から火柱が発生し、２人に向かった。爆音が響いた時には２人の体は廃墟の壁にめり込んで焼け焦げていた。

（このルカリオ…今確かに火柱を！）

突然発生した火柱にルシーは目を丸くして驚いていた。その間にバシャーモが接近してきていたのをソルが立ち塞がり、攻撃を阻止していた。それに気づいたのは拳と金属がぶつかる音が出た時であった。

「ふん！」

繰り出された左足の踵蹴りを片手で掴み、ルシーに殺(や)れと手招きをして合図を出した。

「うおおおおお！！」

雄叫びを上げ、身動きの取れない獲物の脳天から長剣を地面まで真っ逆さまに振り下ろした。肉が切れる音と地面に硬い物がぶつかった音が辺りに響いた。目の前にいた標的が全ていなくなったのに安堵の息をルシーが吐いた。一方、ソルはまだ警戒を怠っていなかった。

「まだ安心できねえぞ。瓦礫の壁を見てみろ…」

「なんだと？……今、目の前に映るモノが幻だと思いたい…！」

ガララララ！！

瓦礫がなだれる音と共にざっと１００体はいる半悪魔が大群で押し寄せてきた。

『我々ＴＡＫＡＨＡＳＩ(タカハシ)はそれはもう何体もいるとも。存在が残念であるがね。』

「…！」

押し寄せてきた半悪魔改め、ＴＡＫＡＨＡＳＩの大群から発せられた残念という言葉に反応し、目を向ける。押し寄せてきたＴＡＫＡＨＡＳＩの大群がもう一度、一斉に声を上げた。

『ＴＡＫＡＨＡＳＩの由来は我々が高い橋のように連結して増える

ため高橋と呼ばれている。いや、我々自ら呼称したと言うべきだな。そして残念だ。』

「由来の説明どうもお疲れ！つーか面倒くせえからさっさと来いよ！」

ＴＡＫＡＨＡＳＩの言葉にイラ立ち、若干キレ気味になったソルが低姿勢になって足場に炎を発生させ、爆発を起こした。

「アサルトブースト！」

爆発の推進力を活かして大群に向かって右ストレートをしながら突進していった。ＴＡＫＡＨＡＳＩの大群はボーリングのピンのように次々と跳ね飛ばされた。

「燃えろォ！」

大群を通り過ぎたと同時にフレイムポールを一気に１０本飛ばし、大群を少しずつ焼き払っていく。

「そこをもらったぞ残念だ！」

「うぜぇから黙ってろ！」

ＴＡＫＡＨＡＳＩと化したヘルガーがソルに向かって突進していくが、炎を纏ったＶＷで力任せに切り伏せられた。ヘルガーは”貫い火”の特性で炎によるダメージを遮断できるはずであったが、法力の炎はヘルガーの身を一気に焼き尽くしていった。

（バカが、オレがただの炎を使う訳ねえだろ。）

法力は全て形質、能力自体が自然現象やポケモンの技とは違う。ま

た、破魔能力を持ち合わせている。物質的に起こすことは自然現象等と同じではあるが、形質、能力的な面となると違いが出る。例えば”蓄電”の特性であっても雷と法力となるとダメージを完全に遮断できない。また地の法力等はひこうタイプのポケモンにもダメージを与えられる。今回は半悪魔の派生型のＴＡＫＡＨＡＳＩと化したヘルガーが炎の法力をくらい、さらに破魔能力で大ダメージを受けた。こういうものである。

「次はどいつだ！」

息を少し切らしながらもそう言い放ち、フレイムポールを次々と飛ばしていく。大群の片隅から見ていたルシーはソルの実力に圧倒されて中々動けなかったが、彼が数で少しずつ虚勢になっているのに気づき、大群に向けて命を掛けた最大威力をサイコキネシスを掛けた。

「う…うぐぐ……」

『我々を1人で止めるとは対した度胸だな。だがそれでダメージを与えられる思っているのかね？』

ルシーはソルがＴＡＫＡＨＡＳＩと戦っている間に何発も技を使用していた。そのため、サイコキネシスを発動することも維持することも難しかった。結果、今のサイコキネシスで形成している力は何か？それは自身の生命であった。

「せいぜい動きを止めるだけだ……やれ、ソル！！」

体がピシピシと音を立てて激痛が走る中もサイコキネシスを維持し続け、ソルに倒せと叫ぶ。

「よおし、やってやろうじゃねえか！」

これまでに無い最大のチャンスにソルが頷き、大群の周りをアサルトブーストで移動し、ＶＷで大規模な円陣を描いた。描いた時に生じた溝は僅かに小さな火柱を立てていた。描き終えたと同時に大群の真ん中に滑り込み、左手を強く握り込んだ。

「牢炎（ろうえん）！！」

技の名を発したと同時に円陣から赤色の巨大な火柱が足元から空に向かって昇った。火柱の辺りは音が全く聞こえなく、火柱から出ている火の粉が霧のように広がり続けている。火柱によって暗く照らされている瓦礫からルシーは目の前に映る炎の柱を見上げていた。

「…今になって思い出した。これが、ドンの言っていた破魔の炎、法力の力か……」

すでに亡くなった尊敬していた人の名を口にしながら今だに昇り続ける火柱を見続けた。燃え盛る火柱は２０秒ほど立ってようやく消えた。そこに円陣の中心にいたあの人物だけが立っていた。

「ゼェゼェするじゃねえか…さすがは死炎（しえん）のコスト削減版。下げてもこれかよ……」

円陣の中心に立つソルはふらふら揺れて立ち尽くしていた。周りにあれだけいたＴＡＫＡＨＡＳＩは全て消し炭のようになっており、影のようなものが映った焼け跡が所々目立った。それだけで威力の高さを物語っている。相当の力を使ったようでその場に崩れるように膝をついた。

「だいぶ力を使ったようだが、大丈夫なのか？」

ルシーが足をふらつかせながらも駆け寄り、声をかけた。その時ソルが出した返答は以外なものだった。

「結構やばいな…左腕がな…」

「左腕？な…なんだこれは！」

ソルが言った左腕は想像以上に酷い状態であった。なんと、ルカリオの腕であったモノは黒い爪が光る五本指の手と刃のような棘が目立つ腕に変化していた。しかし、異変はそれだけではなかった。

「ゲ…ゲホ…！ゲホ！ゴホ！ゴホ…！！」

「どうした！どうしたのだ！？」

急に激しく咳き込み始めたのだ。その瞬間に左から赤黒いオーラが突如発生し、右側の体へ広がり始めた。赤黒いオーラが通った場所はルカリオから別のモノへと変化していた。

「ル…ルシー……逃げろ…早く、逃げろ！」

ソルは震える口でルシーに逃げろと言うが、ルシーは突然のことに動けずにいた。赤黒いオーラは右側の体の殆どを侵食していき、ついに赤黒いオーラが全身に行き渡った。次の瞬間、大地を揺らす咆哮のような叫びを空に向けて上げた！

「グゥゥゥアアアアアア！！アアアアアアアアァァァァゥグオオオオオオオオ！！！」

「うわ！」

咆哮のような叫びに生じた衝撃波にルシーは吹き飛ばされた。咆哮を上げたソルは今、ルカリオではなくなっていた。背中に4枚の刃のような翼を生やし、体全体からは黒い鋭利な刃が生えている。そしてドラゴンのようで狼のような悪魔がいた。

「…ソル、貴様は…何者だ？」

ルシーは悪魔と化したソルに問うが、今のソルは返答を返さなかった。ただ立ち尽くしているだけであった。呆然としている間に後ろから瓦礫を踏む音が聞こえたため、振り向いた。その先にいたのは銃剣を握りしめ、灰色の神父の服を着たゾロアークがいた。ルシーが先ほど言った問いにそのゾロアークが代わりに答えた。

「そいつはポケモンであって全く別の存在の悪魔でもある。魔人っていったところだな。」

「…！まさかこのルカリオ！」

「ああ、そうだ。テメエは裏の裏を知ってるみてえだな。怪我人は下がってろ。この『終末の魔獣』は恐ろしいったらありゃしねえからな。」

そう言いながら銃剣2本を交差させて火花を散らさせた。金属音が響いたと同時にソルが眼を紫に光らせた。咆哮を上げて両手から以前使用していたあの大剣、ダーインスレイブを生み出して地面に突き刺した。腹に埋め込まれた眼のような赤い石からは蒼い炎と紫の炎を出していた。

「ギヒェアアアアアアアアアアアアアア！！！」

「ジュワユーズ第2聖騎士ウラヌス！行くぞゴラアアアアア！！」

突如現れたウラヌスと名乗るゾロアークと悪魔と化したソルが目の

前に映る獲物を刈り取らんと突撃した！

ミッション3：殺し屋（便利屋）　VS　TAKAHASI（後書き）

４話目でいきなり暴走！どうするソル！？

ウラヌス「おい、俺口悪くなってねえか？オイ！！」

だってコンセプト「乱暴神父」だし。

ウラヌス「メン・ザ・ファッカー！！」←アッパーカットを繰り出した

ぶへえあ！！意味分かって言ってるのかそれ！？

ルシー「…私は次回どうなるのだ？」

さあどうでしょう？

次回は本当どうなる？次回を待て！

ミッション４：敗者の集い（前書き）

…まさかの３度目だよ……

ソル「…まあいいか。」

では、しばらく続くコラボ回スタートです！

ミッション４：敗者の集い

「クソ、ここはどこだ？真っ暗で何も見えねえ…」

ソルが気づいた時に目にしたものは真っ暗な空間であった。それだけではなく、波導も魔力も全く感知できない。出口を見つけ出そうと走りだして探るがやはり何も感知できない。

「……」

黙り込んで上を見上げた。辺りは真っ暗なくせに頭上だけは赤と黒の雲のような物が渦巻いていた。

「きたねえ雲だ。」

悪態を吐きながら再び走りだした。しかし、その途中でどこからかピピ！と鳴り響く電子音のようなものが聞こえてきた。

ピ…ピピ……ピピ…ピピピ…

「何なんだこの音は？」

こちらが走っていく度にその電子音は少しずつ大きくなり、連続で鳴る量が増えてくる。

「よく分からんが嫌な予感がするな…」

ピピピ…！ピピピピ……！

「ちょっ、本格的にマズくねえか！？」

ピピピピピピピピピピピピ！！

電子音が合間なく連続で鳴り響き、身の危険がいよいよ迫ってきた。電子音を振り切ろうと後ろに振り向いて逆側に走るが、電子音は遠ざからなかった。それどころかさらに大きくなってくる。耳に劈くほどの大きさになった時、音が突然鳴り止んだ。

「…急に止まりやがった……げっ！！」

今まで何も感じなかったこの空間から突然強大な魔力と波導を感知した。しかし感知した時にはすでに遅かった。

【ウゥルェイィグァン（レイ・ガン）！！！】

目の前にある暗い空間から唸り声のような声と青白い直線状の極太レーザーが迫ってきた！

「なっ！？うおわあああああああああ！！」

「アアアアアアア！！」

「……ようやく目覚めたか。」

目が覚めて見えた物は典型的な病室と今、自分がいるベッド。右横で腕を組んでいる青いコートを着た己と瓜二つのルカリオである。ソルをそのルカリオを見た瞬間、もの凄い嫌な人物を見る目をした。

「…ゴンザレス『テメエ』…」

「誰がゴンザレスだ…！」

ゴンザレスと呼ばれた青コートのルカリオは柄をコートの中から取り出してソルの喉元に突きつけた。ゴンザレス…自身の名なのか、愛称なのか、ともかく青コートのルカリオの手に持つ物は柄である。刀身がなく、せいぜい六芒星の鍔部分が付いてあるだけである。しかし、刀身部分となる根元には何やら噴出口のような穴があった。

「俺はレイブだと前々から言っているだろうが…今から魔人、魔帝でないお前の首をこれで刎ねてもいいんだぞ…」

「ライト〇ーバーかビームソードの類か？スターウ〇ーズも大概にしろよ。それとお供の刀はどうした？」

怒りむき出しのゴンザレス改め、レイブは今にも殺しに掛かろうとしているにも関わらず、ソルは平然としていた。単なる脅しだと思っているのか、殺されても平気なのか？ともかくそれに便乗するように皮肉的な問いをした。

「暗魔刀（あんまとう）ならお前の『レイ・ガン』のせいで消し飛んだ。どうしてくれる…！あれは3億の材料費を賭けて鍛え上げた究極の名刀だというのに…！」

「は？レイ・ガン？それ光線銃だろ。（ん？なんかデジャブが…）」

「お前が悪魔化した時に放ったレーザー砲だ！照射内全てを一時的だが空間を無にし、太陽の核並みの超高温で対象を消し飛ばす最悪に等しい威力と範囲を併せ持つ。あれを防ぐのに俺の刀を使ったん

だぞ？」

レイブは嘲笑と怒りの混ざった声で罵倒してきた。携えていた刀がよほど大事であったのだろう。それもレイ・ガンという反則地味たレーザー砲を防ぐほどの代物であるらしい。それはそれまでとして、どうしても引っ掛かることがあった。ソルはこの男がどういった者か知っている。

自分が知る人物の中で最もたちが悪いということ。足を刺身を切るように少しずつ切り落として殺すような残忍極まりない殺し方をし、ターゲットが子供であったら何の躊躇いもなく平気で殺す男だ。それが弟であってもである。

そして自身の血の繋がった兄であるということ。そう、血だけは…

そんな男が何故、弟であるソルを助けたのか？また、ルシーはどうなったのか？

「おいクソ兄。長剣を持ったエルレイドはどうなった？」

「マフィア組織カスパールのルシー＝ベルナドットだな？ふん、やつなら別の病室で寝ている。そしてウラヌス、非常に五月蝿いドダイトスがな。」

「あ？ちょっと待てよ。ウラヌスとドダイトス？…ウラヌスのやつ、記憶がない悪魔化したオレにやられたのか……ドダイトスのほうは何者なんだ？」

「それはお前が行って誰か確かめろ。お前と親しい者のようだったがな。」

（親しい？…まさか！）

まさかと思い、ベッドから飛び出て病室から出て行った。その様子を見たレイブは「だからお前は俺に勝てない。」と小さく呟いた。

開いたドアから2人のガラが悪いドサイドン、ゴローニャが入室し

てきた。その2人を見たレイブは手に持っていた六芒星の柄を強く握り、青く光る光刃を穴から射出させた。

「へっへ…オメエがレイブか？」

「何だ、弱そうじゃねえか。」

「……雑魚が。」

ドン！ドン！

病室内に首を飛ばされた鈍い音と水が地面に叩きつけられたような音が病室内に広がった。血塗れとなった病室内で指を鳴らし、1人のルクシオの少女を虚空から呼び出した。

「掃除しておけ。ほっといても此処は「何も気にしない」だろうが念のためだ。」

「ヤ、Я（ヤー）…」

「あークッソ！何だって最近はこんなんばっかなんだよ！つーかここジュワユーズじゃねえか！！」

病室から出て目にしたものは魔界のゲート関連で共同調査をした悪魔を狩る私設組織ジュワユーズの中であった。何故レイブがここに連れてきたのか、そして彼はここの一員なのか？疑問に思ったが、とりあえずレイブはここの一員ではないと解釈し、ルシーとウラヌスとそのドダイトスと会うために波導でどこに居るか探った。

「3人は…666号の病室……ドダイトスの波導、やっぱりドルク

か！」

居場所を特定し、６６６号室へ向かった。

「おいバカ３人！とっとと起きろ！」

ドアを勢いよく蹴り開け、ズカズカした足取りで室内を見回った。ルシーとウラヌスは重傷を負っていて昏睡状態であった。とはいえ、無事であった。では、ドルクと言ったドダイトスはどうだろうか？

「ドルク、お前無茶しやがっ……」

刹那、戦慄が走った。魔帝であったソルの攻撃を防いできた異世界の探検隊、そのリーダードルクはボロボロの状態であった。木は焼け焦げ、甲羅には痛々しい傷跡が残っていた。

「……」

目の前の者の状態が信じられなくなり、黙り込んだ。ドルクはソルが見てきた普通のポケモンの中で誰よりも強かった人物だ。以前使用していた大剣ダーインスレイブの重い一撃にも平気で耐えることのできる防御力と、突破口を切り開く攻撃力があった。そのドルクが、意識がなかったとはいえ、悪魔化した己の手によって重傷より先に行きそうな状態になっていた。

「あのドルクがこれほどまでに追い詰められるとは思っていなかっただろう。」

「ゼウスか…」

後ろから発せられた者の正体はジュワユーズの最高司令官、ミュウ

ツーのゼウスであった。

「ウラヌスの記憶を通して悪魔化したお前とウラヌス達の戦いを魔法で見せてもらった。率直に言おう。もう法力は使うな、身と周りの破滅を招くぞ…」

「…だけどよ……」

「お前の身勝手のせいで1人死んだのだぞ？」

ゼウスとソルの会話にレイブが突然現れて割り込んできた。レイブの言葉に反応したソルは聞き返した。

「誰が死んだんだ？」

「俺の魂1つだ。」

「あっそ、ならいいな。てっ！」

関係ないというべきソルの返答に青筋を立てたレイブが六芒星の柄から青い光刃を出して斬りかかった。寸前で避けた後、腰に掛けていたVWを手に取って喉へ切っ先を向けた。

「やりやがったなゴンザレス！！」

「（ピキ）……お前、死（殺）ね！！」

両者とも怒りのボルテージが最大になり、完全に力任せで刃を振り下ろした。途端に病室の壁に風穴が空いてしまい、その付近はドロドロに赤熱していた。

「……修理費は出してくれるんだろうか、あいつら。」

「最高司令官…修理費を……」

「私が払うのか！？」

哀れゼウス。後ろから貞ｋ（ｒｙ　のごとく現れたラッキーに肩を捕まれ、修理費を請求されたのだった。

「クソ兄。オレはずっと前からテメエが気に食わなかった……」
「それはこっちの台詞だ…その首、一度斬り落としてやる！」

ミッション４：敗者の集い（後書き）

今回、フォックリザハートさんからのポケモン不思議のダンジョン
ブレイブトレジャーズ　から、回想形式で登場してもらいました。

ドダイトスのドルク君です！詳しくは原作で。

ソル「レイ・ガンのせいでこうなったのか、ドルクのやつが…」

…そうなるね。今回は早いですがここまでで。では次回！

レイブ「…俺は後回しか…（怒）」

ミッション5：予言者のいる街へ（前書き）

さて、今回ちょっとしたキャラ紹介をします。今は非公開になってます？がシーズン2リメイク前の『ラグナロクと魔界の破壊者』でソルの兄とした登場したソロ。今回彼はレイブに名前を変更しています。

レイブ「何故変えた？」

被るから。そして性格をもっと悪くするため。

レイブ「斬り落とすぞ…」

待て待て…；

レイブの意味は「喚(わめ)く、怒号、うわ言を言う」など様々な意味があります。ここでのレイブは怒号として扱います。

レイブ「……死ね！！」

ギャアアアアアアアアアアアアア！！

ミッション５：予言者のいる街へ

「クソ兄イイイイイ！！」
「ソオオルウウウウウ！！」

ソルとレイブは周りのことなど考えず本気で殺しに掛かっていた。レイブに至っては瞳孔がかなり危険なとこまでいっている。

「死ね！！このクソ！！くそったれ！！神速、はどうだん！！」
「お前がシネ！！ノロマ！！屑！！弱者の中のミジンコ！！シャドークローシャドークローシャドークロー！！」

お分かり頂けるだろうか？彼らが文字通りの殺し合いをしていることが。レイブはビームソードのような物を振り回し、ソルはエンジン全開でＶＷから燃え盛る炎を噴出させて同じく振り回している。手にしている剣の形は違うが、どちらも似た性質を持っていた。それはどちらも超高温の刃を有していること。

「「死ねよゴラ（コラ）アア！！」」

そのため、刃が交わる度に周辺に熱波が広がる。が、そんなことを二人は気にしない。今の彼らは、眼前の標的を殺しに掛かっているのだからだ。

「腕を切り落としてくれる！！この雑魚が！！」
「こっちの台詞だゴラアアア！！」

それから約数時間後…

「まったく…お前達兄弟の仲は本当に最悪だな。本気で殺しに掛かるなど兄弟のすることか？」

殺し合いと言う名の兄弟喧嘩に痺れを切らしたゼウスがソルとレイブをサイコキネシスで拘束、説教をしたその後、崩壊のした病室に二人を移していた。ちなみに、二人が病室修理費の請求書を手渡されることになるのは後の後になってからである。

彼は最高司令官であるのにサボリ癖があってドラマばかり（特にトリ〇クをこよなく愛している。）を見ていて馬鹿に見えるが、実は恐ろしく強かったりする。現に高速で移動していたソルとレイブをサイコキネシス一発で捕らえているのがその証拠だ。

「何で止めるんだかなぁ…」

「…不服だ……」

一方で捕らえられた上に説教までされた二人は仏頂面をして立っていた。「もうどうにでもしてろ…」とも一瞬思ったゼウス。

「とりあえず、俺はもうここに用はない。帰らせてもらうぞ。」

すでに用が無くなったレイブは仏頂面をしたまま病室から出て行った。ゼウスはまだ話しがあるようでサイコキネシスで捕らえようとしたが、それより早くレイブが駆け出して逃げられた。逃げられたか、と呟いたゼウス。呟いたのはかっこつけ、つまりわざとである。

「あいつってジュワユーズの一員じゃないよな？」

前から聞きたかったことをソルがゼウスに聞いてみる。するとゼウスは当然のように首を横に振った。

「だよな。あの野郎がこんなお人好し組織に入る訳ねえからな。」

「お人好しは余計だ。それよりも、お前はこれからどうするのだ？」

「何を？」

やや聞き流し気味に聞くソル。自分で何を？とは言っているが言われることは大体分かっていた。

「ドルクとルシーの看病はこちらがするが、お前はこれからどうするのだ？と聞いている。お前の記憶も見たが、アジトの入り口らしき所から言葉を話す半悪魔、ＴＡＫＡＨＡＳＩが来たようだな。その中にテロリストの手下とリーダー全員がいたようだが…」

「ああ、それか。…一応オレが全員抹殺したのを依頼者に伝えとく。

「正体不明の輩に手柄を取られました。」なんて言ったら探り出す

かもしれねえしな。探り過ぎてオレ達の世界の領域にまで踏み入れてもらいたくねえよ。」
「…それもそうだな。」

ソルの言ったことにゼウスも静かに頷いた。ソルとゼウス、目的はやや違うがやる事は大体同じだ。裏世界に凄む悪魔を表に出さないようにするため。もし彼らが、魔性の存在が表に出たらどうなることか？力を手にした者、力に溺れる者、力を欲する者が求める物は何か？それは更なる力だ。これだけ言えば秩序によって保たれている世界がどうなるかなど、容易に想像できるだろう。

「ま、ていうことだ。オレは何時も通りにやっていく。法力は使い過ぎなければ暴走はしない。じゃ、帰ります。あ、ルシーのことは頼んだ。」
「待ちたまえ直子。」
「誰が直子だ、上田。」
「そういうお前もノリに乗るな。」

謎の漫才が一瞬起きたやりとり。帰るのを止めたのにはそれ相応の用事であるのだろうか。

「少し予言者の所へ行ってこい。お前の未来を必要最低限だけ、教えてくれるはずだ。」

予言者、その名を耳にしたソルは胡散臭そうに顔を顰めて帰ろうとする。が、サイコキネシスで捕まえられた。

「何でそいつの所に行かねえとなんだ？聞かなくたっていいだろ？」
「未来を先に見る、聞くことによって己の運命を変えられることができる。今のお前は見ていて不安だ。ウラヌスの記憶で見ていたが

悪魔化していたお前の剣筋は全て力任せだった。そして、今も力任せな剣筋だろう？押し通し、力押しでは大切なモノ全て失うぞ。いつかな。」

真剣な眼差しと言葉を聞き入れ、ゼウスの言う通りにすることにした。

「ちっ！分かったよ。予言者ん所行けばいいんだろ？」

「本当にこんなとこに居るのかよ？」

ソルがいる現在位置は出身、在籍国のアンブリス国とは違うロンディス国。一昔古い年代の物品が路上販売されている古い街、アンティークシティにいた。で、ゼウスが言った目的地の目の前にいるのだが…入ろうか困っていた。

「いや…これ、まず住めるのか？」

昭和の駄菓子屋を思わせるような建物で、随分ボロくなっている木材で建てられている。彼は切実に思う。本当に住んでいるのか？と。

「お邪魔しまーす。」

意を決して入店？したソル。ガタガタの引き戸を開けて室内へと向かった。

「うぉぉ…」

外から見た状態は目も当てられない惨状っぷりだったが、室内は和式の典型的なもので綺麗に整頓、清掃されていた。興味が湧き出たが、ここに来たのは予言者から予言を聞くためなので割り切って目的の達成するべく足を運ばせる。しばらく長い廊下を歩いていると門のような扉が目に映った。

「ここにいるのか？」

そう呟いて扉を押した。扉を開けた時、目にした空間は足場全てに畳みが敷かれた大広間。奥にはお猪口に酒を注いでちびちびと飲むコジョンドがいた。そのコジョンドは瓶を見ていて見えていないようだがこちらに気づいているらしく、酒を飲みながら手招きをしている。招きに従って彼の目の前まで足を運んだ。

「初めまして、ソル。私はシュウ。予言者の案内人だ。ゼウスから話しは聞いている。予言を聞きたいそうだな？」

シュウと名乗ったコジョンドが２０代前半くらいの青年の声を発し

て立ち上がり、一礼をした。しっかりとした挨拶にソルは気分があまり良くないのか、退屈気味に愚痴をシュウに洩らした。

「正確にはオレが行かされただけどな。」

「そうか。ところでまず最初に、君に謝らなくてはいけない。」

「ああ？どうことだ？」

何か？と、聞き返すとシュウは重心を低くして拳を強く握り、ファイティングポーズをとった。

「これだ。」

「……なるほどな。」

ソルはそう言ってＶＷを数１０ｍ先の支柱に向けて投げ、刺し込ませた。そしてシュウと同じくファイティングポーズをとった。

その頃ジュワユーズでは、ドルクは何時の間にか回復していて、ゼウスと何か話していた。

「で、そのシュウって奴強いのか？」

「ハハ、強いも何も……」

あの男に勝てた者など誰一人としていない。風の法力使い、シュウにはな。

ミッション5：予言者のいる街へ（後書き）

次回、ドチートコジョンドと対決です。ソルは勝てるのだろうか！？

ソル「マジかよ。」

ゼウス「それより少しずつストーリー基準脱線してないか？」

たぶん大丈夫！

シュウ「答えになっていないな。」

ウボァー！

ミッション６：組手　予言者との対面（前書き）

今回モサリッシュ戦闘はご了承を。

ソル「ふざんけんなゴラ。」

ちょ、ＶＷを向けないで…あべし！

ソル「毎回やられ役乙。」

ミッション6：組手　予言者との対面

ゼウスとドルクが話し合っている最中、ソルとシュウは組手をしていた。

「せい！」

畳みを強く踏み込んで体を捻り、裏拳を斜め上に振る。シュウは裏拳を一歩下がって避け、バネのように足を踏み込んで左フックを脇腹に向けて打った。

「グッ…！」

踏み込みと腰の入った左フックを脇腹に受けたソルが呻きを上げた。が、同時にチャンスと思って左手を右手で掴んでこちらに引き寄せた。

「オラァ！」

引き寄せたと同時に飛び膝蹴りをくらわせ、そのまま一回転して回し蹴りをシュウの脇腹に当てた。

「…やっと当てれた。」

「動きを止めないほうがいいぞ？」

「ッ…！」

蹴りが直撃しても平然としているシュウが側面にステップし、肘打ちを肩に目掛けた。それに対し手の平で肘を掴み、やや後退して衝

撃を和らげつつ直撃を避けた。後退した瞬間を見極めたシュウが小さくジャンプしつつ前進をし、空中に浮いてる間に突くように連続蹴りを行う。嵐のように迫りくる蹴りを全て左手と腕を使って受け流し、右手の拳に力を入れて真横に振った。だが、その時にはシュウはすでに目標の攻撃位置にはいなくなっており、数メートルの距離を取っていた。

「チッ、速いな…」

華奢な体格をしているが故の素早さなのだろうか、相手に隙ができない限り小回りの利く攻撃でも当てられない時が多々ある。疑問に思いながらも舌打ちをして仕切り直し、接近して右手を強く握った。目を細めてソルが向かって来ているのを見ていたシュウは眼を瞑り、ゆっくりと目を開けた。

「…そろそろか。」

そう小さく呟いた瞬間、足を強く踏み込んで突っ込んでいった。

（…？いきなり直線に来やがった。）

気を張り巡らして技の出を見切るために目を凝らして相手の出方を窺った。シュウは数メートル前で姿勢を低くし、膝を大きく曲げて蹴りかかろうとしていた。普通、数メートルも距離が離れているのなら技を見切ることは容易い。使う武器となる物が自身の体というのなら尚更だ。しかし、ソルは油断なく構えを崩さずに集中をしていた。何かが来るのを身で感じているからだ。

「ふっ…」

小さい掛け声と共に足を伸ばして飛び、体を1回転させて踵蹴りをソルに飛び込みながら繰り出した。飛び込みの速度は速いを通り越して異常であった。

「ぐほ……」

あまりの速さに見切れきれず直撃してしまった。腹の急所に位置する水月を的確に蹴られ、体をくの字に曲げて呻き声を上げた。さらにこれだけではなく、蹴りをくらった直後の腹に何か鋭く尖ったような衝撃が当たった。衝撃の正体は白い靄のようなものであり、非常に強力な風圧を発していた。

「どうした。君の力はこの程度ではないはずだぞ？」

一撃を当てられて隙が丸出しになっているソルにシュウが言った。この言葉を聞いた瞬間、これまで戦ってきた記憶が少しずつソルに蘇ってきた。

【ヒャッハー！！どうしたどーーした悪魔ーー！！】

「ア…タリマエだろ！」

（あ？…何でオレこんなに弱くなってるんだ？）

【おい、何だその軟弱な一撃？】

「ふっ…」

ドゴ！！

（こいつの一撃だって、すぐに復帰して動けたのによ…）

「クソがぁ…」

記憶が流れている最中に受けた掌打で声を呻かせながら距離を取って右手を強く握った。すると全身から赤い炎がオーラのように噴き出し、辺りに熱気が広がった。ソルの持つ炎の法力だ。

「炎の法力をくらいやがれ…！ガンインパクト！」

宿った炎が爆発を引き起こす技、ガンインパクトを右ストレートの要領で腹に向けて打ち込もうとした。シュウは僅かに避けただけで次の攻撃に移行しようとしていた。僅かに避けただけで済ませた彼を見たソルが笑みを浮かべた。

（掛かったな！）

振り抜かれた右腕に宿った炎が爆発を起こして空気に衝撃と振動を行き渡らせた。拳による攻撃は避けられても距離があまり離れてさえいなければ、ガンインパクトは爆発による衝撃と振動によって関節的にダメージを与えられる。シュウは見事にガンインパクトによって発生した衝撃と振動に直撃した。だが、妙に手応えがない。隙が全く生まれないのだ。

「棒立ちするな。それではすぐに驚いて退く軟弱な殺し屋と一緒だぞ？」

「ぐぉ…！」

反応しきれない速度で遠心力を活かした回転してからの肘打ちが脇腹にめり込んだ。肘が深くめり込む度にメキメキと骨にヒビの入る音が体中に響く。恐らく、幾つかの骨にヒビが入ったのだろう。脇腹が僅かに腫れ、ジクジクと痛み出していた。

「ゼウスから聞いたぞ。便利屋と営んでいるとな。では、君は何の

ためにこの職をしている？道徳を必要としない悪魔狩りだけならまだしも、何故道徳に反する人殺しも行う必要がある。殺し屋という名誉のためか？殺害による快楽のためか？どうなのだ？」

「……名誉？…そんなもんクズ野郎にくれてやる。快楽は否定しないな……この仕事は楽しいしやめられん。何せ、強弱がはっきりするからな…それに、『何故殺すか』って意味を失わずに済む……！」

シュウの問いに歯を剥き出して言い放ち、炎を宿らせた足で足払い蹴りをする。当然のように避けられたが間髪入れず畳に手を着けてアッパーキックを顎に目掛ける。

「出は速い。が、その後の隙がでかい。」

「そうかよ。ならこれはどうだ！」

アッパーキックを行った直後に空中で腰を無理矢理捻り、体が真っ逆様の状態で回転蹴りをシュウのこめかみにピンポイントで当てた。

（これならどうだ…！）

ダメージはあると確信していた。手応えはあったのだから。しかし…彼は、

「ふむ、申し分ないな。」

「ゲッ…（平然としてやがる…どんだけ固いんだよ！）」

腕を組んだまま目を半開きにし、ソルの眼を見て平然としていた。

（この体格でどれだけ体が丈夫なんだよ。こんな体格で！…ん？体格？）

疑問を持ったまま攻撃を中止して再び距離を取って相手の特徴を見直す。どうにも気になって仕方がなかった。何故あれだけの細身で重い一撃を平然と耐えられるのか？

（おかし過ぎるだろ。いくら体が丈夫だからってダメージを殆どくらってないなんてよ。……そういえばあいつに攻撃が当たる直前、何かフワッとした感覚があったな。直線に突っ込んできた時もそうだ。オレの側面にあった扉がガタガタ揺れてた。……まさかあいつ……）

「動きを止めるな。」

ソルが考えて動きを止めている間にシュウが接近し、掌打を当てようとしていた。唸りを上げる掌をソルは胸に当たる直前で掴んだ。

「…やっぱりな。お前、風の法力使いだろ。」

「ようやく気づいたか。」

「今思えば簡単なことだったっけな。相手の特徴に気づかないまでにオレは弱くなったか…！」

掌を掴んだままにしてシュウを投げ飛ばした後、フレイムポールを飛ばした。燃え盛る火柱はシュウが拳を軽く振ると全く別の方向に進んで炎が広がった。

「攻撃を当てる直前、お前は当たる箇所に風を発生させて衝撃を逃がしていた。直線に突っ込んできた時は器用に風をお前だけに当てるようにしてたんだろ。側面に風が当たるのだけは防げなかったようだがな。」

「…正解だ。少しは調子が出てきたか？」

「お陰様でちょっとはな。」

「もっとも、今の君のままでは私に勝てないがな。」
「チッ…」
言葉によるダメ押しを受けてやや憎々しく舌打ちをした。ソル自身、こういった性格の相手に若干イラついたのは久々であった。
「さて、続きをやろうじゃねえか。」
組手の続きを再開するべく、ファイティングポーズをとるが、シュウは掌を突き出して「止め」の合図をした。
「いや、これで結構だ。君の実力は十分だ。」
「……もう終わりかよ…」
組手の突然のキャンセルにガッカリな気分になったソル。せっかく調子が出てきたのによ…。心の奥底から残念な気分になった。
「そう気分を下げるな。一日一回までなら組手は何時でも受け付ける。」
「マジか。」
「ただし今日は諦めたまえ。」
「くそ……」
「……では、予言者の所へ案内しよう。」
シュウの言葉を聞いて組手を再開しようとしたソルだったが、当然のように却下、スルーをされた。「チッ、まだいいじゃねえかよちくしょう…」とぶつぶつ悪口を吐きながら支柱に刺して置いたＶＷ引き抜いて後ろ腰に担ぎ、北西側にある障子までシュウと歩いて行った。北西側にあった障子には不必要な鍵穴が何故か存在しており、その鍵穴にシュウが鎌に似た奇妙な鍵を差し込んで障子を引いた。

障子の先にはフェンスで囲まれた小さな公園の景色が広がっていた。そこにポツンとルージュラ1人が後姿でベンチに座って煙草を吸っていた。シュウがジェスチャーで「どうぞお行きを。」をしてルージュラの所までソルを行かせた。ソルがルージュラの前まで来るとそのルージュラが煙草を吸いながら60代の老婆の声を発しながら挨拶をした。

「こんにちわ、ソル。」
「ああ、こんにちわ。」
「そこに立っててもつかれるでしょう。さ、ここに座りなさい。」

予言者に言われるがまま、ソルは隣りに座った。予言者は煙草を吹かしながら横目でソルを見て言った。

「さて、必要最低限のことを知りたいようだけど、何を知りたいのかしら？」
「あ～、オレってこの先行ったら…」
『あなたの魂だけ、死ぬわね。』

……え～～～……本当にこれだけしか教えてくれないのかよ……

ミッション６：組手　予言者との対面（後書き）

ソル「本当にこれだけかよ……」

必要最低限だからね。

ソル「もうちょっと詳しく教えてほしいぞ。」

答え丸ごと見せてくれるわけじゃないんだからさ…我慢しろ。

ソル「チッ……」

（今回ソル舌打ち多いなあ…）

ミッション7：メモリーリバース（前書き）

今回、シーズン1より前のソルが登場します。

ソル「今のオレとは違いがハッキリしてるな。」

うん、めっちゃ違いがあるよ。

では、ミッション7…

ソル「レッツロック！」

ミッション7：メモリーリバース

【あーお母さんお母さん、トイレどこだっけ？】
【馬鹿ね～あなた。トイレは目の前にあるじゃない。】

テレビ画面で中年親父のニドキングが母親のニドクインにトイレがどこにあるかを聞いた。そんな馬鹿な親父に母親のニドクインは目の前にあると指摘する。

【あーよっこらせ。】

馬鹿な親父がトイレのドアノブを捻って扉を開けた。だが、それと同時に家がガラララララ！！と崩れて全壊した。テレビの画面にいる観客はゲラゲラと大爆笑をした。そして現実でも、

「うひゃひゃひゃひゃ！！そ、そんな馬鹿なことがあるのか！？」

ゼウスが馬鹿笑いをしている。ゼウスがいる此処はドルク、ルシー、ウラヌスのいる病室だが、お構いなしに持ち込んで観賞して大爆笑をする。そして起きていたドルク、音で無理矢理叩き起こされたルシーとウラヌスも映像を見て爆笑した。

「あんなのって有りかよ！？ギャハハハ！！」
「いや、それ以前にどうすればあんなことが…くく……！」
「やべえ！！メッチャ腹イテェ！！」

彼ら、ドルクとルシー、ウラヌスはそれぞれまだ完治していないにも関わらず観賞、ルシーを除いて爆笑をしている。しかし、その3人の中でドルクが一番重傷を負っていたにも関わらず、ほぼ完治し

ていた。まだそこまで治っていないのはルシーとウラヌスである。
「ゼウスゥ！！テメエなに人を意味ねえ所に行かせて病人にお笑い番組見せてやがるんだあ！！」
「ぶべらば！？」
そんな談笑の中、ゼウスは入室してきたボロボロのソルに格闘技の一種、飛燕連脚をモロにくらう。
※ゲーム、テイルズシリーズでもありますが、実際にも飛燕連脚が格闘技にあります。
蹴られた勢いで壁に激突＆バウンドをして床に突っ伏した。
「や、やあソル…予言はどうだったかな？」
「殆ど意味ねえよ！！一言で終わったわ！！何でオレの名前知ってたのかは不思議だがな！」
「一流の予言者は相手の全てを見通せるからな、イテテ…」
予言者の特徴を軽く言いながらもゼウスはよろけて起き上がり、テレビを見ていた彼ら3名を指差した。
「さて、見ての通り彼らはだいぶ回復している。明日にはほぼ完治するだろう。」
「いや～お前の攻撃は凄かったぞ。俺も防御が崩れかけたからな。」
「そ、そうか……」
ドルクがそう言うが、ソルは目を逸らして短く答えただけであった。正直、この法力を今すぐに使うのを止めて、悪魔の力を使いたかった。法力よりも悪魔の力のほうが力が大きく、圧倒的であるのだから。しかし今のタイミングでそれを使ってしまったら、自分自身の力を再び見失うこととなる。それは『あの時』に実証され、体験し

たのだから。

（あの時のオレは悪魔の力だけしか使っていなかった……ただ単に力に酔ってただけじゃねえか…何やってんだオレは？『あの時』より前にクソ兄にも負けて思いしらされたのによ……）

この時、ソルは再び一部だが記憶が鮮明に蘇ってきた。『あの時』より前の、初めて負けた時の記憶を……

２０１２年１０月６日の時である。

この日は当時１７歳であるソルのＦＥＮＲＩＲ開店予定日であるはずだった。「はずであった」が付く理由は単純な話、店名が思いつかないからである。しかもこの店名は何ヶ月前から考えているというのに今だに決まってないのだ。この日もソルはダラダラな日を過ごそうとしていた。しかし、この日は彼にとってようやく店名を決められる日となった。それは「あの男達」が来たからだ。

「……あーあー…ひーまーだ！！」

現在のソルとは掛け離れて、１７歳のソルは性格が非常に悪かった。何故なら皮肉を連発し、おちょくるのが好きで、何よりも悪魔の力に酔っていた。そこら辺にいるヤンキーそのものとも言える。

チリリリリン♪チリリリリン♪

「チッ…またか！」

ソルはイラ立ちながらもデスクの上に置いてある受話器を足で絡めてから手に取り、受話器を口に近づけた。

「悪いが開店準備中だ。」

それだけ言って相手の応答にまったく答えず、有無問わず、通話をやめた。椅子に座ったままでユラユラ体を揺らし、デリバリーピザを口に運んでじっくり味わってぶつぶつ愚痴を漏らし始めた。

「まだ店の名前も決めてねえのに……しかもどこのどいつだ？ここの電話番号を掛けてくる奴は。毎日同じ時間で鳴らしやがって…」

１７歳の彼の愚痴と皮肉は絶えることが殆どない。それほどまでにしょうもない存在なのだ。この時のソルは。

ガチャリ……

しかしソルが愚痴を言っている間、一人のネイティオが入店してきた。顔にシワがある辺り、年配の男性を思わせる。そのネイティオを見るなり、ソルはフッと鼻で笑い、適当に皮肉をぶち撒けた。

「何だ、トイレに行きてえのか？だったら急いで行けよ。それとも

腹減ったのか？」

あらかさまに馬鹿にする言葉を発するが、年配のネイティオはそのことなど気にも留めず、ソルの中の何かを焚きつける言葉を口にした。

「君がソル＝ザ＝ヴァイオ（紫）ソウル（魂）かね？『ソロ＝ザ＝ブルーソウル』の片割れだとか……」

「……どこでその名を聞いた…」

年配のネイティオの謎めいた言葉にソルは敏感に反応し、聞き返した。すると年配のネイティオは一枚の紙を差し出しながら言った。

「君の兄からだ……」

「…あぁ？」

「彼から君への招待状だ…朝の９時１０分に目的地が現れる……是非、受け取って頂きたい……」

年配のネイティオは最後のそれだけ言うと、突然姿を消した。部屋の周囲を見回すが、気配が全くせず、姿も見えなかった。完全にこの場から消えたようだ。

「目的地を明かさずに時刻だけ明記か。よっぽど大胆なパーティーなんだろうなあ？」

そう言いながらデスクに足を机に乗せて再び座り、ピザを手に取ろうとした瞬間……

「ギギャギャギャギャ！！！」

目の前から大鎌を持ったポケモンでない鬼のような生物が突然出現し、無防備なソルの胴体を鎌の刃で貫いた。血飛沫が椅子から壁へと飛び散り、ぐったりとした彼に先程と同じ大鎌を持った生物がまた突然現れ、四方八方から刃を刺され、切り込まれた。ソルに鎌を突き立てたこれらの生物はれっきとした悪魔であり、ソルの狩りの対象でもある存在だ。だが、その狩るはずの存在にソルは逆に狩られた。

現在ソルは一回分死んだ。

「あーあー……まったくよー…どうせロクなパーティーじゃねえのはハッキリ分かってんだよクソ兄め…」

首、腹、足、あらゆる箇所を刃で切られ、刺されているというのに平然と立ち上がり、白と黒の拳銃をデスクから手に取って出口に歩き出した。と、見せかけてまだ刺さった鎌を持って引きずられている悪魔を蹴り飛ばし、黒と赤のコートをだらしなく掛けてあるハンガーから外して着込み、悪魔が群れを成している方向を向いて楽しげな笑みを浮かべてこう言った。

「だがぁ……楽しいパーティーになりそうじゃねえかあ！！」

「……ル……ソル！」
「…ん？ああ、悪い。…何て言ってた？」

ぼんやりと記憶に浸かっていたためか、ウラヌスに呼び掛けられてもすぐに答えられなかった。それどころか何を言っていたのかも認識できなかった。
どうやら記憶に相当精神を持って行かれてたようだ。

ミッション7：メモリーリバース（後書き）

今回、とある作品との伏線も入れました。そしてソルのもう一つの名も公表です！

ソル「ヴァイオソウルって…ヴァイオって紫（ヴァイオレット）の略か？」

そうさ。ちなみに現在の名字、ネファステュリスについては過去編で語りたいと思います。

ソル「さて、今のオレはどっちが本当の名だろうな？」

どっちでしょうかねぇ？次回を待て！

ミッション8：力に溺れる者（前書き）

今回はちょっと番外編になるぞ。

ソル「番外編ってなんだよ。」

今回の主役はソルの兄、レイブなのだよ。

レイブ「俺が主役…？」

ソル「はあ！？ふざけんな、何でこいつが主役になんだよ！」

ちょっとばかしソルとレイブの関係と彼のアピールをね…うん。スポット当たらないとまずい人物だから。

では、ミッション8

アクション！

ミッション8：力に溺れる者

兄弟

ある者はとても大切な存在と呼び、ある者は余計極まりない存在と呼ぶ。つまり兄弟を大事に思う者がいれば、兄弟を妬み、恨み、怒りを抱く者がいる。

「クソッ…あの負け狼め……」

ソルの兄、レイブも兄弟のレッテルの例外ではなかった。レイブはソルのことが嫌いだ。その理由は単純かつ理解不能で、『気に入らない』というだけ、ただそれだけなのだ。何をされたワケでもない。何かをしたワケでもない。

だが、気に入らないのだ。

ただ単純に。

それだけなのだ。

「暗魔刀は消し飛んだ…だが奴は弁償もしない……さらにあの面(ツラ)が腹に立つ……俺の手がけた刀を一瞬で消し飛ばすとは……ゥゥゥゥゥゥ許せん！！」

ドゴオ！！

怒りに身を任せ、薄暗い電灯の明りで照らされる空のない街でビル

の壁を拳で叩いた。ヒビが最上階にまで到達し、数秒後に崩壊した。その際、瓦礫と化したコンクリートの塊がレイブに降り注いだ。

「許せん許せん許せん許せん許せん許せん許せん許せん！！！」

怒りに支配された凶獣の如く怒り狂って怒号を発した。憂さ晴らしにと青いコートの内側から柄を取り出し、青い光刃を射出させて降り注ぐ瓦礫の破片を１つ残らず、塵すらも例外なく切り刻み始めた。

「あの負け犬が！屑が！俺より愚かな奴に刀を消されるとは屈辱の極みだ！！」

青い光刃から放たれる高熱の刃の斬撃跡が虚空に留まり、降り注ぐ塵と瓦礫は一瞬にして赤熱し、高温の液体となって地面に爛れ落ちた。

「ハァ…！ハァ…！ハァ…！」

降り注ぐ物全てを赤熱する液体に変えたレイブは、散々全力の怒号を吐き散らしたせいで息切れを起こして上半身を地面に向けて垂れ下げた。それはそうだろう。感情が深く移入した大声を全力で出し続ければ体は疲れる。

「……クソ…」

燃焼し切れないストレスにイラ立ちながら光刃を収めた柄をコートの内側にしまい、崩壊したビルの壁に寄りかさって目を瞑った。

（……遅い……まだか…）

目を瞑って早３０分ほど経った。レイブはある目的でここに待機している。その目的はこれから彼に襲い掛かる相手を、殺すことである。

「……来たか…」

呟きと同時に空気がざわめいた。何ともいえない不快な感触が全身に伝わる。大気が僅かに冷たくなった。それらの現象に呼応するかのように、目に映る建物が突然、渦に吸い込まれるかのように歪み始めた。歪んだ建物は変化を始め、グロテスク極まりない血に汚れた石造りの建物に成り始めた。

「力だ…もっと、力を……死んだ母さんを…守れるほどの力を……」

変化していく空間の中、水に溺れているかのような声を発する。目は酷く充血しており、今にも目から血が滴り落ちそうなほど真っ赤に染まっている。

シャリン……シャリン……

何所からか金属音が響き始めた。相当重い物を引き摺っているかのような音だ。一方からではなく、幾つもの方角から聞こえる。音は、次第に大きくなってこちらに迫ってくる。

「レイブ！」

真上から突然、男の声が聞こえた。見上げると左目に黒い眼帯を付け、体全体が黒く染まった初老のリザードンが、何百本という日本刀を差し込んだ刀入れを背負っていた。レイブが黒いリザードンを目で確認すると、左の掌を大きく広げて彼に向けた。連携をするよ

うに黒いリザードンが、差し込まれた日本刀の内の一本を投げ渡した。

ギャリン！……ギャリン！

音が耳障りなまでに大きく聞こえてくる中、レイブは右手で柄を掴んで刀身を引き抜き、目で全体を追った。

「チッ…安物か。」

「そう言うんじゃねえよ！れっきとした名刀だぞ！」

「俺の速さに追いつけないのなら安物確定だ。」

言い争いの引き金の引いたレイブに、背後から鉄の塊が襲った。しかし、鉄の塊がレイブに当たる事は叶わなかった。何故なら振り落とされるより早く、鉄粉と化していたのだから。背後にいる何かを、後ろを向かず網状に斬りつけた。

「グ…ゲゲ……」

斬られた『何か』の正体は、全身が緑と赤で塗られた人間のマネキンのような異形の生物だ。右手には鈍器に該当する柄があったが、肝心の頭部分はレイブの斬撃によって無くなっている。マネキンらしき異形の生物にも先程レイブが振るった斬撃が走り、網状の肉片となって崩れ落ちた。

「雑魚が……」

確実に仕留めた事を確信し、流れ落ちる水のような動作で刀身を鞘にしまった。その時、パキン！と鞘の中で何か音がした。この音を聞いたレイブが、腹を立てて舌打ちをした。

「これだから安物は……」
「だから名刀だっつってんだろ！オメエが異常過ぎるんだよ！」
不満を愚痴るレイブに、黒いリザードンがキレ気味に怒鳴った。ちなみにレイブの今持っている日本刀はどうなっているかというと…刀身全体がバラバラに折れている。玄人はおろか、いくら素人であってもこうなったりはしない。黒いリザードンの言う通り、レイブが異常過ぎるのである。格を付けようにも付けられないほど、だ。

「次、よこせ。」
「まったく……ほれ！」

次の刀の要求に黒いリザードンは面倒臭そうに2本目の刀を引き抜き、白い鞘に赤い鳥が刻まれた日本刀をレイブへ投げ渡した。刀を受け取ったと同時に先程のマネキンのような生物が、何時の間にかレイブの周りを十数体で囲んでいた。

「名刀”朱雀”！そいつなら折れねえだろ！」
「ただの案山子（カカシ）だな…」
「……」

どうよ！と言わんばかりに胸を張るが、そんな態度を鋭利に貫いていく槍の如く、厳しい言葉が貫いて行った。話しの最中マネキンのような生物が一斉に飛び掛かって来たが、レイブは僅かな隙間を見抜いて素早く包囲網から出た。殺しに掛かるような連中に為す事は、ただ単純に血祭りへと仕上げるだけだ。レイブは右手に掴んだ柄で刀身を僅かに引き抜き、マネキンの塊に突進した。眼前にまで塊が迫った時、幅一杯に強力な一閃を放った。一撃では止まらず、そのまま塊の中に斬撃を加えながら一直線に走り抜けた。レイブが鞘に刀身を収めた後になって、目に視えるほどの真空の刃がマネキンの

肉に喰らいつき、美しく引き裂いた。

「…やはり安物だな…」

パキン……

2本目の刀、名刀”朱雀”もレイブに耐えられなかったらしく、鞘の中で無残に砕け散った。黒いリザードンは、右手で頬杖を付いてため息を吐いた。（こいつ…俺の刀を後何千本折る気なんだ？）と、心の奥底で呟きながら、だ。

「次。」

「…ほれ。」

そんな彼の様子を見ても気にしないレイブは、さらに刀を要求した。もうどうにでもしろと言わんばかりにレイブへ3本目の刀を投げ渡した。次は黒い鞘に四角形の黒い鍔が填められた日本刀だ。だが、レイブはそれを見た途端、鬼の形相をして試し斬りもせずに膝蹴り。鞘ごと刀身を破壊した。

「お前は俺を馬鹿にしているのか！？四流の刀など見たくも触りたくもない！」

「贅沢言うんじゃねえよ！それよりも来てるぞ連中が！」

あまりの贅沢様に黒いリザードンが再び怒鳴り出した。彼の刀はレイブにかなり折られてはいるものの、その大半が名刀なのだ。刀鍛冶からは脚光を浴びているというのに、レイブの評価があれだ。皆から認められているのに、ただ一人の男に酷い不評を浴びたら、怒りたくなるのも無理はない。というよりも無理だ。

「ええい、小遣いにしかならない雑魚「悪魔」が！！次！」

不満で怒りが込み上がっているレイブが、大群を成して押し寄せて来たマネキンのような生物改め、『悪魔』を煩そうに見て４本目の刀を要求した……

次！

次！

次！

次！

次！

クソ、面倒だ…！全部纏めてよこせ！！

「……また…全部折りやがった……」

黒いリザードンの所持していた刀が全て使い物にならなくなった頃、レイブが悪魔と呼んだ生物……否。正真正銘の悪魔は全て、肉片かミンチとなって地面に転がっていた。大量虐殺の本人であるレイブは、不満そうな顔をして折れた刀、折った刀を一通り見回した。

やはり、今回も駄目だった。

「テツゾウ…金はいくらでも出す。だから……二週間以内に暗魔刀をもう一度鍛え上げろ。」

テツゾウという黒いリザードンはレイブの要求に、目を丸くした。

数秒後に頭をだらしなく下げ、深いため息を吐いた。

「おいおい…魔剣をまた造れってのか？いくら金出されてもあれを鍛える気にはなれねえよ……何回死にかけたと思ってやがる！」

「ほう、おかしいな。刀とは命を賭けて鍛えるのではなかったのか？」

「刀と魔剣は別だ！！形こそ日本刀だが、あれは刀として成り立たん！ドス黒い力を貯め込んだただの鉄塊と言っても過言じゃねえな！」

「ええい、いいから鍛え上げろ！拒否するなら材料費を絶つぞ！」

「げっ…！」

材料費を絶つ。これを聞いたテツゾウが、顔を青ざめて引き攣らせた。

「…わーったよ…鍛えればいいんだろ？」

鍛冶を行なえないのがよっぽど嫌なのだろう。テツゾウは俯いて暗魔刀と呼ばれる魔剣を鍛える事を承諾した。

「よし……テツゾウ、手は抜くなよ？」

渋々承諾をしたテツゾウにレイブが念を押した。投げ槍な気分となったテツゾウは、折れた刀を掻き集め始め、刀入れに入れていった。その様子を少し見届けたレイブは建物全体を見回すと、背を向けて歩き去って行った。

テツゾウが折れた刀全てを回収し終え、何処へ飛び去って行った頃、建物はレイブが始めにいた状態へと元通りになっていた。

レイブの破壊したビルも含めて…

ミッション8：力に溺れる者（後書き）

今回の回で分かった事を述べよ、ソル。

ソル「オレとあいつには母がいたって事と、あいつがマザコンでどうしようもない力馬鹿って事だな。」
レイブ「何か言ったか、負け狼…？」
ソル「テメエを力馬鹿って言ったんだよクソボケ…」
レイブ「上等だこの弱者！！」
ソル「うるせえよハイパー短気野郎！！」

…二人が犬猿の仲ってことも分かったね。

ゼウス「いや、前からだろ。」

ミッション9：リンボシティでの交差1～白い狼～（前書き）

長らくほったらかしにしてたけど、現在のストーリーを進めていくぞ。

ソル「ようやくか。」

ちなみに、今回はドルク君とコンビを組んでもらうから。

ソル「コンビ…？」

では、ミッション9

ソル「ＦＩＲＥ！」

ミッション9：リンボシティでの交差1～白い狼～

「なんかすげぇ～独創的な街だな。」

異世界から突然来たソルの親友、ドダイトスのドルクは、目へ鮮明に移る奇怪な街並みに心を少し躍らせていた。奇怪な街並みとは言い方が悪いかもしれないが、本当に奇怪なのだから仕方ない。何せ建物の配色と造りが全てバラバラなのだから。純白の豪邸と隣りに貧相な造りの家、またすぐ隣に近くに西洋の料亭と和風が漂う屋敷、正直言って、『文明と造りがごちゃごちゃ』である。心躍らせる彼とは別に、隣にいたソルは目を街から逸らして露骨に嫌そうな顔をしている。

「クッソ、ゼウスの野郎……」

依頼の押し付け。ソルがここにいるのも、それが理由だ。

「ところでソル。少し依頼を頼まれてくれないか？」

「あぁ？」

ドルク達の安否を確認し、もうやる事が無くなったソルは、数日ぶりに事務所へ帰ろうとしていた。がしかし、そこをゼウスに呼び止められる。何でも依頼をこなせという、今のソルにとって面倒な事この上ない内容である。言葉を無視して帰ろうとするが、サイコキネシスで捕らえられた。

―またかよ―

もはやお決まりとなったサイコキネシス拘束。ウンザリだ…。眉間にしわを寄せて顔を思いっきり顰める。「まあ、そんな事はどうでもいい。」とでも言うように、ゼウスは淡々と勝手に話しを進め始めた。

「五十嵐(イガラシ)・鉄三(テツゾウ)と呼ばれる黒いリザードンからの依頼でな、リンボシティである素材を購入してきてほしいというものだ。」

「おつかいかよ…つーか、それぐらい自分で行けよ。」

「行けない理由があるから我々へ頼んで来ているのではないか。先程言ったこのリンボシティはな、奇妙な出来事が頻繁に起こるらしいのだ。」

「奇妙な出来事?」

目を細めてゼウスに問いをぶつけた。するとゼウスは…

「周りの建物が血で塗れた石造りの建物に変化するらしいのだ。また何の変化が起きていない時に、未来や過去の人物を複数目撃したという現象も起きている。」

「…何だその奇天烈な街は?まるで汚いワンダーランドだな、ハハッ!」

「皮肉笑いで済む話ではないぞ?話しを戻すが、テツゾウがその街で購入した物の事なんだが…“神鋼”という武具店で一番値段の高いの鋼と赤く光る黒い石を購入したそうだ。本人曰く、あれがまた欲しいんだと。」

「…街変化するぐらいで買いに行けないなんてー―」

「おっと言い忘れていた。この街、「悪魔」が数えきれないほど居るらしいぞ?無害の連中も居るようだが、テツゾウはその中で野蛮

な連中にしつこく狙われて死にそうな目に遭ったとか。…くく！」
「……」
「行ってくれるな？いや、行きたまえ。」
悪魔という交渉条件を出された今、ソルに断る権利は実質なかった。
憎々しげに舌打ちをし、強制的に依頼を引き受ける事にした。
「依頼に行くなら俺も行くぜ！」
その時、リンボシティに興味を持ったドルクも行くと言った。
「…ま、人員が増えただけまだマシか。」
少しは仕事も楽になるか。そう思ってソルはドルクの同行を受け入れた。ゼウスがまだ動くには早いと安静にさせようとしたが、彼の体の治り具合を見てしばらく黙り込んだ後、「分かった、行ってよろしい。」と許可を出した。

そして、現在に至る。武具店の“神風”を模索する中、ソルは何体もポケモンに化けた悪魔を見かけた。また、ドルクにも普通のポケモンとは何となく違うと思ったのか、偽装した悪魔をいくらか見抜いていた。
「にしても飽きるほど数が多いな～。ここらにいる悪魔は。」

あまり信じられないようにドルクが言った。それに対し、ソルも「ああ。」と相槌を打った。

「前にシドの野郎が呼び込んだ数ほどじゃねえが、結構いるな。」

シド。かつて魔界の門を開けようとしたダーテングであり、半身悪魔の存在、魔人でもある。シドが大事を働いた際、何らかの召喚術を行使したらしく、異世界から来訪者が４人現れた。

一人は、白と黒のロングソードを手にしたツタージャ、ツカサ。彼は会ったその当日からすぐに元の世界へ帰って行ったが、またその数日後に今度は三人同時に現れた。その内の一人は2人と違う場所、ジュワユーズに現れた。

その名はフォック。種族はリザードンであるが、頭に青いゴーグルを装着し、首に同じく青いスカーフを巻き、腰に聖剣の如く煌めく剣を差していた。

残る二人はフォックとも密接な関係のある探検隊なる者であった。

一人はリーダーのドダイトス、ドルク。もう一人はドルクを支えるパートナーのゴウカザル、シルム。

この三人もＦＥＮＲＩＲ、ジュワユーズの総戦力を結集させてシドに挑み、皆で勝利を掴んですぐに元の居場所へと戻って行った。しかし、一体何が起きたのだろうか、ドルクは再びこの世界へと足を踏み入れていた。しかもその踏み入れた場が、最悪の状況であった。

「…ソル……お前あの時、悪魔になってたぞ？立ちの悪い事に暴走までしてたじゃねえか。お前の兄、確かレイブとウラヌス、あのエルレイドと俺が束になっても苦戦したし……何が起きたんだ？」

ドルクは、あの時ソルの変貌した姿が忘れられずにいた。

「ギシャァァァァァァ！！！」

法力を使い過ぎて悪魔と化したソルの姿と力は、ドルクでさえも畏怖を抱かれた。３ｍ以上の外見に刃で構成された黒い甲殻を全身に纏った黒竜。頭部には狼の風貌をしたもう１つの甲殻が、兜のように重なっている。背中に生えた４つの刃の翼がちょっとした動作で火花を上げ、尻尾は大剣のような形で２ｍほどの長さで翼と同様、ちょっとした動作で火花が拡散を起こす。そして先程発した雄叫びは、周りの建物を吹き飛ばすほどで、禍々しいオーラを発するダーインスレイブは、大気に浮く細かい塵を破壊していた。ドルク、レイブ、ウラヌス、ルシー。ルシーはすでに疲弊していたが、実力揃いが束になっても完封するのに小一時間掛かった。

その要因の１つは…

「ギヒェアアアアアアアア！！」

雄叫びを上げてレイブに勢いよく突進した。悪魔化したソルは、走行中に真空の刃を自身の周りに発生させていた。これは移動中で甲殻に潜む刃が真空を発生させているためだ。近接攻撃を仕掛けようにも、剣圧の有効範囲が広く、上手く近づけなかった。まず１つ目の要因がこれである。

そしてもう１つ…

「ぐっ…！」

乱雑で力任せだが、巨体からは想像できない速度でダーインスレイブによる薙ぎ払いを行なった。黒い柄の日本刀で攻撃を防いだレイブだが、直後に襲い掛かった剣圧の衝撃があまりにも強かった。足場が一の文字の如く、抉れた。

「シャァァァァァアア！！！」

「ぐおっ…！！」

ダーインスレイブへの一撃に耐えるのが精一杯だったレイブが、尻尾から放たれた突きで胴体を貫かれ、瓦礫の山へ投げ捨てられた。要因その2が、反則的な攻撃の速度と威力、隙の少なさだ。

「シャアアアッ！！！」

「なん……！？」

ドルクの前に赤い残像が移った瞬間、翼に赤いエネルギー玉を4つ集束させたソルがダーインスレイブを左手に持ち替え、振り落とそうとしていた。

「ロックフェンス！！」

瞬時に岩の壁を4重に発生させ、防御態勢に移った。周りをギリギリ岩で囲った瞬間、でかい衝撃が襲った。エネルギー玉が被弾したのだ。1発目はやり過ごせたが、2発目はそういかなかった。

「やべ…っ！」

頭上からあの巨大な凶刃が顔を覗かせ、ドルクに襲い掛かってきた。

間一髪回避に成功したのだが、後一歩遅かったらと思うと、悪寒が走った。

「大人しくしやがれ！」

物陰の死角からウラヌスの銃剣と悪の波動がソルを襲った。しかし、その攻撃は見破られ、銃剣はおろか、悪の波動までが全て尻尾の大剣で振り払われた。獲物を狩る優先順位を変えたソルが、ウラヌスへ赤いエネルギー玉と槍を数本飛ばした。槍と玉は大爆発を起こしてウラヌスを飲み込み、周りの物を全て破壊した。

「あっぶねえ！」

巻き上がった赤い煙幕の中からウラヌスが這い出てきた。余裕のある口調で言ってはいるものの、彼の左腕は若干、焼け焦げた跡があった。完全な回避は間に合わなかったようだ。

「クソ…まずは動きを封じなければ…！」

ソルと戦う前の戦いで既に疲弊していたルシーが体を鞭を打ってサイコキネシスを発動させようとしたが、やはり限界が近いらしく、足の力が一瞬抜けて膝をついた。それでも発動を試みるが、ソルの動きが想像以上に早く、捕らえることができなかった。

「ギシャアア！！ギシェアアアアアアア！！！」

ドルクとノックバックから立ち直ったレイブとウラヌスに近接攻撃を仕掛けていたソルが、二回雄叫びを上げた。赤い残像を生み出して移動する瞬間移動で一気に距離を置き、大顎を開けて口の中に赤紫のエネルギーを一気に集束させた。

「お、おい…あれってマズイんじゃねえか！？」
「黙れ…そんな事は分かっている……」
「何か仕掛けてくるぞ！」

ヤバイ…マジでヤバイ…とんでもねえのが来る……。殆ど戦闘に参加できてないルシーも、この場にいる全員が本能的に感じた。しかし、よほどでかい攻撃をするのか、隙が大きかった。

（今しかない…！少しでいい！届け！）

自分にとって最後のチャンスと踏んだルシーが、最後の力を使う気でサイコキネシスを発動した。サイコエネルギーが伸びていき、ソルへ向かって行った。このまま奴を捕らえる！そう思ってさらにエネルギーを伸ばした。が、その時に何かバツン、と切れた感覚がした。

体の感覚が無くなっていた。

「……駄目…か…」

せめての拘束も叶わず、ルシーは何も出来ずに倒れた。

（チッ…役立たずが……！）

役に立たなかったルシーをレイブは横目で睨み、先陣を切って日本刀、レイブが失ったとされる魔剣、暗魔刀を構えてソルに突進して行った。

「おい馬鹿！引き返せ！」

ウラヌスが声を上げて引き返させようとしたが、「弱者は引っ込んでいろ！」という言葉しか返されなかった。その間にドルクは再び防御を行うために、ロックフェンスを今度は６重にした。

「おい！レイブ！！戻ってこい！！」

「図に乗るなよソルーーー！！！」

ドルクもレイブを引き止めようとするが、憤怒で支配されたレイブは、ソルに暗魔刀を構えて突っ込んで行った。

「死ねえええええええ！！」

暗魔刀の刃が差し掛かった時、ソルの口から赤紫のビーム砲が、発射された。

「レイ・ガン！！」

瞬間、レイブはビーム砲に飲み込まれ、姿が見えなくなった。ルシーとウラヌスをロックフェンスの領域内に避難させたドルクは、レイ・ガンが目の前まで迫ってきた時、岩の防壁を守る事に全ての力を注いだ。

それ以降、ドルクは何も覚えていなかった。気がついたのは、ジュ

ワユーズの病室内との事だ。

「何が起きた…か。」

ドルクが体験した事を知らないソルは、ただ適当に言い流そうとした。

「ちょっと力が暴走してな。あの様だ。」

「ちょっとの暴走だあ？嘘つけ！」

しかし、嘘は尽く見破られた。

「お前がちょっとの暴走であそこまでなるか！何か使ったんだろうが！」

「……」

ドルクの言い分に不足はない。ソルは…悪魔として、魔人として適正ではない力を使ったからああなったのだ。法力という、悪魔を殺す力を使ったのだから。

「それに今のお前、なんか冷めてるぞ。ソル…俺にはっきり言え。お前、何を使ったんだ？」

「…法力って力を知ってるか？」

何も頑固に黙る必要などあるまい。そう思って、ドルクに法力とは何なのか、またそれが自身にどう影響したのかを細かく話した。己に起きた精神異常についても、だ。

「…なるほどな。てことはお前、ようはそのハッサムに負けてから身勝手なプライドで自分に向いてない力を無理に扱ってるって事だ

な？」
「言い方が何か酷くねえか？ま、違っちゃいねえな。」
ドルクの言葉に、ソルは冷たく答えた。
（オレ…何時の間にか以前より皮肉を言うようになったな。）
自分が『また』少しずつ冷たくなっているのを薄々と感じた。数か月前まで、常時テンションの高い彼が、今では皮肉を頻繁に言うようになっている。これではいずれ皮肉屋になってしまう。
自分がアホらしい。そう思いながら右手で頭をだらしなく掻いたその時、真横を白い日本刀を持った真っ白なルカリオが通って行った。
「…すげえ真っ白だな。」
染めたのだろうか？青い毛の部分が全て、雲のように真っ白で染まっていた。ドルクが呆気にとられていた時、ソルは疑いの目で白いルカリオを見ていた。
「……レイブ？」
真横を通って行った時、少ししか見えなかったが、確かにレイブの顔をしていた。
「レイブ？…あいつ、レイブなのか？気配が全くしなかったから気づかなかったぜ。」
「違う…気配がしなかったんじゃない。『感じ取れないんだよ』、オレ達が。」
怪しいと思ったソルは、レイブと思われる白いルカリオを早足で追

い始めた。

「あ、おい！待てよ！」

一人勝手に向かって行くソルを、ドルクが後を着いて行った。

「…おい……おい！」

早足で白いルカリオに追いついたソルは、肩を叩いてこちらに振り向かせた。振り向いた白いルカリオの顔は、確かにレイブそのものであった。…だが、

「ん？ソルか。久しぶりだな。」

「……は？」

「前に会ったのは三年前だったな。」

ソルはこの時、悪夢を見ているのだと自己錯覚をした。肩を叩いて振り向せた瞬間、周りの景色が一気に一変したしのだ。ドルク、ソル、レイブ？を除く人々が忽然と消え失せ、何時の間にか深緑の木々に囲まれた神社にいた。それに加え、先程レイブが落ち着いた声音を出して「久しぶりだな。」とつい最近会ったばかりだというのに突然言ってきたのだ。おまけに、憎しみの気配を全く感じないのにはさらに驚いた。

だが、何よりも驚く事は、波導を……全く感じない事だ。

『波導は見えるのに、感じない』

ミッション9：リンボシティでの交差1～白い狼～（後書き）

さあ新しいミッションが始まった最速に異変が発生だ！リンボシティで最初にあった者は、なんと三年後のレイブ！？

ソル「いきなり混乱の激しい展開かよ。」
レイブ「さ、三年後の俺が、こいつだと…？」

まさか始めからこんな奴が現れるとは思ってなかったでしょう。まあしかし、これには驚いたんじゃない？

波導は見えるのに感じない。

これ、早くも解明されちゃいます。

レイブ？「まあ、次回を待っていてくれ。」

それでは、グッナイ！

ミッション１０：リンボシティでの交差２～剥奪の証と母の真実～（前書き）

今回は、レイブに起きた異変と、最後に驚愕の真実をソルは知ることになります。

ソル「最後のは何だ最後のは。」

だから、ソルがアッと驚く真実だよ。

レイブ？「あまり詮索はしてほしくなのだが、仕方ないな。」

…今のと違和感がすごいある……

ミッション10：リンボシティでの交差2～剥奪の証と母の真実～

「茶と菓子を持ってきた。好きに摘まんでくれ。」
「……（太っ腹だな。）」
「ぁぁ…（こいつ、オレに一回も菓子なんか出してくれなかったのによ…）」

神社の茶室に足を踏み入れていたソルとドルクは、レイブから差し出された和菓子と緑茶を適当に摘まみ始めた。ここでソルはレイブの顔を改めて見ると、従来の赤い瞳が青い瞳へ変わっていたのに気づいた。

（ここ、こいつの家かよ……）

レイブの振る舞い様と自然に神社の室内へ上がって行った様子を見ると、彼の家としか思えない。しかし、この神社はレイブ一人だけしかいないらしく、ドルク以外に波導は感じなかった。レイブを抜かしているのは、波導は目視できるものの、感知できないからだ。和菓子の醤油煎餅を一枚食べ終えたソルは、早速レイブに質問を投げ掛けた。

「で…簡単に聞くが、お前って3年後のレイブか？」
「…お前達の経緯はいくらか聞いたが……まあ、お前の言う通り、俺は3年後のレイブ『だった』だろうな。」

どうやら、3年後のレイブであるようだ。…『だった』？何故かあそこで不適切な過去形が出てきた。聞き逃さなかったドルクが、訊ねる。

「『だった』ってどういう事だ？」

聞かれてすぐにレイブは答えなかった。障子の外に広がる裏庭を見ながら、間を開けてレイブは、ぽつりと言った。

「今の俺は、もうレイブの名を捨てた。」

「捨てた？」

「捨てただって？」

「あの名では3年前の俺と同じになってしまうからな。今はこの神社の前神主から元々授けられた赤魂不知火（アカタマ シラヌイ）の名を使っている。」

「アカタマ＝シラヌイ…か。」

「まあ…その姿なら不知火（シラヌイ）って名づけられるのも無理はないな。」

以前の自身を斬り捨てるためなのか、白いルカリオと化したレイブ改め、シラヌイはそう答えた。しかし、まだ訊き足りない事がいくらかある。それについて、ソルは再び訊き出そうとした。

「……3年後のレイブがお前って事は分かった。だがまだ訊きたいのがある。お前、何でそんな姿してんだ？波導は視えるのに感知はできないし……いや、それよりも、何でお前はオレに対して攻撃意思を剥き出さないんだ？あれだけすぐに食って掛かったお前がよ。」

「それ、か。…強いて言えば、お前に負けたからだな。」

「負けた？それだけで？」

「……3年前、俺は更なる力を求めるべく、ある古塔で魔界を開けようとした。試みは成功したが……その後すぐに悪魔と法力の力と、数々の魔武器を手にしたお前に追いつかれてな、そこで思い知らされた。力だけ求めたところで、真の魂を持ち合わせた者には敵わないとな。」

「…そんな事が起きたのか。ところで、その話しからするにオレは何時か悪魔の力を使うんだな？」

「そうなるな。ソル、爺臭い台詞で悪いが、今のお前は力を渋り過ぎだ。全てはバランスだ。それも均等ではなく、何を多く使い、何を少く使うかだ。これからすぐにそれができないようなら、古塔で3年前の俺に腹を刺され、一度死ぬ末路を辿るぞ。まあ、そのおかげで…おっと、ここまでにしておこう。」
「話し止めるなよ。後、冗談に聞こえねえぞ…」
「冗談ではなく、『実際に起きた』のだから言っている。」

冗談を一切話さないシラヌイ。その点では、レイブの頃の面影がある。無いと言えば、有り過ぎて困る。ソルはそんな顔をしていた。さらに面識が殆どないドルクでもそう思うほどだ。客人二人の反応を見て、ため息を吐いて続けた。

「負けて以来、俺は悪魔を狩る組織から抜け出し、暗魔刀と青いコートを置いていった。持ちたくも着たくもなかったからな。当初ショックが大きかったせいか、２４時間連続で負けた時に言われた台詞が再生され、無気力な日々が2年半も続いた。」
「…ヘビィだなオイ……」

重い事実に思わず、ドルクがぽつりと言った。ああ、とソルも相槌を打った。シラヌイはあまり思い出したくなかったのか、目を背けて無気力そうな顔をした。

「あの重い年月の中、俺はとうとうやってはいけない事をしてしまった。…俺は、あの時に全ての力を投げ出した。」
「全て投げ出した？」
「…魔人はな、悪魔の力を捨てると全ての力を剥奪されるのだ。技、特殊能力、悪魔の力を根こそぎな。その剥奪の証がこの姿だ。」

ソルは絶句した。あれほど力を求めていた奴が、全てを放り出すな

ど。だが、同時に怒りが込み上がった。その行為があまりにも無責任だからだ。ドルクも僅かながら、怒りを覚えていた。怒りが最初に込み上がったソルが、目を鋭くして問い詰めた。

「お前、あのだけの力を手にするのにどれだけ犠牲を出してきたと思ってんだ…？倒してきた悪魔は勿論、お前は普通のポケモンも何千と殺してまで手に入れた力を全て投げ出すなんて無責任の他何でもねえぞ…」

「そう言うとは思っていた。俺が無責任なのは、否定しない。一方的に俺が悪いのだからな……」

「ッ…！力を持ったなら…その力をどう扱うかがお前の役目だろうが！御役御免なんかしやがって！」

ダン！！

卓袱台を勢いよく叩き、燃え上がる怒りを吐き散らした。普段はこの人格、性格でもいいかもしれないが、こういった話題となるとある意味、レイブの頃より腹が立つ。内心で毒づき、まだ何か言おうとするが、ソルは怒りに身を任せていた事に気づき、舌打ちをして言うのを止めた。

「シラヌイ…いくら何でも全部投げ出すのはねえんじゃねえか？」

冷静さ取り戻すため、少し間を置いてから、ドルクがシラヌイに言った。これを聞いて「そうだな…」と小さく呟いた。それっきり、空気が一気に重くなった。その最中にも、ソルは彼に引っ掛かるものを訊き続けた。

「…とりあえず、お前が何でそんな姿になったのかは分かった。が、まだ分からない事がある。今になって何でそんな性格になった？」

無気力な日々からどうやって立ち直って、今の性格になったのか？
些細な事であったが、何となく知りたかった。それに対し、シラヌイはああ、と相槌を打って言った。

「ある日、お前に偶然会ってな、「やる事が見つからないならイガハラという国の“六条神社”に行ってみろ。」と言われ、この“六条神社”の前神主に会って心変わりした訳だ。色々面倒事を押し付けられたがな……」

そう言って壁に立てられた白い刀を指差した。ソルとドルクには何の気配も威圧も感じなかったが、責任の塊を思わせるような日本刀であった。前神主曰く、「守護者の証」らしい。と、シラヌイが言った。だが、あの日本刀を押し付けられてシラヌイがここにいるとは、神主をやらせるためにしか思えなかった。

「とんだ相談料だな。」
「まさに押し付けだな。ハハ！」
「…笑えん。」

悪戯じみた笑みを浮かべたソルに、ドルクも連れて笑った。ジト目気味になったシラヌイが吐き捨てた。この時、僅かであったが怒りの波導を感じた。

（何だ、無くしたとか言った割にはまだあるじゃねえか。）

根本的な部位はまだ残っているらしい。。……シラヌイ…いや、レイブとこう兄弟喧嘩になりそうな事は何時以来だろうか？ソルは不意に思い出した。

ああ、お袋がまだ生きてた頃だ。

「どけソル！」
「テメエがどけ！」

2人の赤と黒に染まったリオルが、冷蔵庫とテレビを片手で持って廊下の通路を取り合っていた。引っ越しの作業とも思えるが、ここはウラヌスが経営するカラッド孤児院という、文字通りの孤児院で行なっている。
カラッド孤児院は訳有りの孤児が多く、その多くが親から見捨てられたり、幼い魔人であったり、挙句の果てにはポケモンに化けた悪魔の子供であったりする。ソルとレイブの兄弟も、その訳有り、魔人の上位種、魔帝に含まれる孤児であった。ただし、お互い面識が全く無く、血は繋がっていても『魂』が繋がっていないというイレギュラーな存在だ。おまけに血で繋がった兄弟であっても『こんな奴知らん。』という敬遠反応をするのである。
この二人の喧嘩は恐ろしいほど凄まじく、体の骨を折り、血飛沫が舞う事などお約束であった。孤児からは「血飛沫兄弟」などという称号を与えられたほどだ。尤も、バイオレンスなだけであって、そ

の点を除けばただの兄弟喧嘩でしかない。しかし、今、物を運んでいる最中で兄弟喧嘩など起きたら、大惨事になる事間違いなしだ。現に喧嘩の一歩手前まで来ている。孤児達は、どうしよう…どうしよう！と慌てふためく事しかできなかった。

「こら、ソルとレイブ。駄目でしょ？」

その時、兄弟の後ろから少女の声が響いた。声音を聞いた孤児達が安心しきった表情をした。

―この人なら兄弟を静められる―

ウラヌスからも絶対の信頼を寄せられているほどの人物だ。ただ、その人物はポケモンの姿をしていなかった。磨き抜かれた金のような金髪にルビーとサファイアのような赤と青が混同した瞳、鮮血のように赤いドレス。肌は程よく白く、身長はというと精々１５０ｃｍ程度だ。見た目からして歳は…恐らく１４～１６ぐらいだろう。

「お袋…」

「か、母さん…」

「こんな所で喧嘩をしない。」

兄弟の目の前に移る人物、お袋、母さんと呼んだその正体は……人に酷似した『何者か』だった。何故『何者か』がついてるのは、ソルがこの人物の正体が人間の姿をしてる以外、何も分からないからだ。

「みんな頑張って物を運んでいるのよ？そんな時にあなた達が喧嘩を起こしたら、迷惑が掛かっちゃうでしょ？」

「そ、そんなのオレには関係ねえよ。」

「お、俺は自分が満足できればそれでいい…」
「またそう言って周りから目を逸らす。そんなのだと何時か見捨てられちゃうよ？」
「し、し、知らねえな！」
「お、俺は…！俺は平気だぞ！」

『何者か』が口にする度、兄弟は動揺が大きくなっていた。強がるものの、この『何者か』には頭が上がらなかった。

「…一人で生きていくのも可能よ。でもね、それじゃあ大切なものを何も感じられず、見つけられずに命を散らしてしまう。楽しさも、嬉しさも、何も感じられないで、無意味な道を辿っちゃうのよ？」
『なっ……』

兄弟が口を揃えて後退りし、驚く。

「何も感じらないなんて嫌でしょ？食べても何も感じない。」
『うっ…！』

グサリと矢が刺さったような感覚がした。

「温もりに触れても何とも思わない。」
『げっ…！』

次にハンマーで殴らたような気がした。

「話し掛けても絶対無視される。」
『ぐぁぁ…！』

四方八方から丸太をぶつけられたような感覚が走った。

「仕舞いには、私やウラヌス、みんなから見捨てられるよ？」
『……ごめんなさい…』
完封。見事に静まった兄弟は、互いに一言だけ謝って荷物運びの作業を続けた。先頭を行ったのは冷蔵庫を持ったソル。その後ろをレイブがついて行った。
「……よろしい。」
兄弟はこの時、声しか聞こえなかったが、どういった表情かは見当がついていた。予想は当たってあおり、『何者か』は慈愛に満ちた笑みで、兄弟の後ろ姿を見守っていた。

「まったく、懐かしいったらありゃしないな。」
兄弟のやり取りが3年後のこいつとするなんてな。馬鹿馬鹿しい、と鼻で笑った。ソルの懐かしそうな顔をしているのを見たシラヌイは、何か思い出したかのような顔をしてソルに言おうとしたが、一瞬躊躇った。
「？お前、今何を言おうとしたんだ？」

一瞬の動作を素早く察知したドルクが、シラヌイに訊ねる。するとシラヌイは…

「いや……母さんの正体を言うべきかと思ってな…」
「ああ、お袋のこと……シラヌイ。お前、今なんて言った？」
「…母の正体だ。」

それを聞いた瞬間、ソルは顔を強張らせて詰め寄った。やはり正体が気になるらしく、「教えろ。」と言った。シラヌイは、母の正体を口に出した。

「……母さんは、アルテミシアは……天使に成りかけた悪魔だ。それ故に、殺された。同族の悪魔にな……」
「……そりゃ…何の冗談だ…？」

母、アルテミシア。その正体は、天使に成りかけた悪魔と告げられた。

ミッション10：リンボシティでの交差2～剥奪の証と母の真実～（後書き）

リンボシティ編に入ってから続々と驚きの事実が掘り起こされてるね！

ソル「おい、それより天使に成りかけた悪魔って何だ？大体天使だと？この世界にそんなのいるかよ。」

あれ？ソルは知らないのか？天使ってね、悪魔と似てるんだよ？性質的にね。

シラヌイ「…次回、また言い争いが起きそうだ。」

ていうか、もう殆ど確定してるしね。

アルテミシア「それじゃあ、次回をお楽しみにね。」

だ、台詞が……これで何回目なんだか…

ミッション11：リンボシティでの交差3～天使とは…そして　奴が現れた～

空前絶後のリンボシティ編3！

ソル「何が空前絶後なんだかサッパリ分からん。」

さあね。にしても、リンボシティってネタバレの宝庫だな。ラスト
でもついに別作品のポケダンにいる奴が姿を現すし。

???「まあ楽しみにしてろや。」

ではミッション11

???&ソル「アクション！」

ミッション11：リンボシティでの交差3～天使とは…そして　奴が現れた～

「天使だあ？馬鹿げた事言うんじゃねえよ！」

天使という言葉にソルは過剰反応を示し、シラヌイの胸倉に掴み掛かった。おい、どうしたんだ！と言ってドルクが手を離させようとするが、彼の掴む力がかなり強く、ビクともしなかった。掴んでいる当人は錯乱でもしたかのように、怒りを露わにして声を上げた。

「ふざけんなよテメエ！天使なんてこの世にいるかあ！！いるとしても所詮天使を語った悪魔だろうが！！」

「ああ、そうだ！天使とは悪魔の生まれ変わった存在だ！」

「……ハッ？」

呆気に取られて掴んだ手を放すと、シラヌイは落ち着いて事の顛末を話し始めた。

「確かに人々が想像しているような天使は存在しない…だが、悪魔の亜種として天使は存在する。にお前はこういうのを聞いた事はないか？天使と悪魔は似たような存在だと。」

「似た…存在？……聞いた事はあるが、それがどうしたってんだよ？」

「天使と悪魔が似た存在だという説が出たのが、悪魔の中で天使化するのを見た者がいるからだ。」

告げられた説に、ソルは口をあんぐり開けて絶句した。ドルクの方も、この説を聞いて驚いた。悪魔の中に天使へとなる存在がいるとは……だが、普通に天使化と言われても、そうなるまでの過程が分からない。シラヌイはその過程についても、話し始めた。

「天使化は一定条件をある程度満たすと稀に起こる現象だ。代表的な例は…」

1：殺しを好まず、平和を望む者

2：慈愛を持ち、守る者

3：傷ついた者を癒し、救済を行う者

4：邪魂を持たず、純真なる魂を持つ者

「この4つだ。」

「……如何にもらしい例だな。…で？お袋はどれに当てはまってたんだ？」

そう聞くと、シラヌイは言うまでもないだろう？と言った。そう言われると、「ああ、そうだな…」と相槌を打った。

「…全部か。」

「全部！？…お前達の母親ってすげえな。それなら天使化が起きてもおかしくはねえな…」

代表例が全て当てはまっている事に、ドルクは驚き、納得を同時にした。確かに、それらの一例全てが当て嵌まっているのなら、天使化が起きてもおかしくないだろう。それにしても、この情報は一体何所で手に入れたのだろうか？「調べた」の一言でも済ませられる事だが、一例の内容がやたらと詳しく思える。ソルが何所でその情報を得たのかを考えていると、思考を読み取ったかのようにシラヌイが口を開いた。

「聖アンブリス国大聖堂の旧館で手に入れた情報だ。既に廃墟と化してはいたが、蔵書は回収されていなかった。この空間から抜け出した時、そこに行ってみろ。」
「…いい情報ありがとよ。具体的で助かる。」

聖アンブリス国大聖堂。シラヌイは、そこで情報を手に入れたと話した。アンブリスといえば、ソルとレイブの在籍している母国だ。それに聖アンブリス大聖堂の旧館はＦＥＮＲＩＲに近く、情報を手に入れるのは容易である。確かな手掛かりを確信したソルは、早急にそれを手にしたいのか、不意に立ち上がって拳を強く握った。

「だったら、こうしてはいられねえな。……で、どうやってここから出るんだ？」

ところでだが、今更肝心な事に気がついた。それは脱出方法だ。思えば、今までただここで途方のない家族話しをしていたのだ。

「げっ…そういえばそうじゃねえか。」

ドルク自体もすっかり会話にのめり込んでしまい、脱出方法を聞く機会がなかった。天使だの剥奪の証だのといった非現実的、ミステリアストークは、探究心を持つものにとっては興味深い話なのだ。のめり込んでも仕方ない。一方、今更脱出方法を考え始めるソルに、シラヌイがため息を吐いて告げた。

「この空間に入ってから２４時間後ピッタリに時空転移盤が最初降り立った場所に出現する。それに乗れば元の空間に戻れるぞ。」
「時空転移盤…か。ていうか、よく知ってるな。その仕組み。」
「俺も前に、ここへ何度か足を踏み入れたからな。」

よく知っているな、と思ってドルクが訊くと、やはり何度も体験をしていたようだ。ついでに、先程会話の中に出てきた『時空転移盤』であるが…それは名の通り、時空の行き来が可能の魔界版エレベーターであり、小規模の門みたいなものである。この時空転移盤は、魔界や長距離の移動に欠かせない代物となっており、魔界での戦争においても広く活用された。何せ携帯性がよく、個人で自由に移動ができるからだ。尤も、初めての場所に繋ぎ、移動するには転移距離相応の【通過料】が必要であるのだが……。

さて、とりあえず脱出手段は1つだけ分かったものの、他に無いかと訊いた結果、「お前に時空転移盤を造る技能があれば出られるのだがな…」と、一蹴された。結局、脱出手段は他になく、当日の時刻が来るまで待つ事になった。

「転移盤が現れるまでの時刻はまだまだ早い。今日はここに泊まっていけ。」

そうした結果、今日はシラヌイの居るこの六条神社に泊まる事となった。ソルは最初、抵抗を受けたが、やがては甘んじる事にした。彼に対し、ドルクは感謝の言葉を言って甘んじた。
その後は普通に和食中心の夕食を取り、神社内にあった露天風呂に長々と浸かり、夜更けまで意味の無い笑い話&雑談をし、太陽の香りのする布団に入り込み、一日を終えようとしていた。

その日の夜…

「ドルク…ドルク……」

「…う……んあ？何だよシラヌイ？」

夜中1時過ぎ。シラヌイに訳も分からないまま、ドルクは揺さ振り起こされた。シラヌイはソルが完全に寝ているのを確認すると、手を掴んで廊下へ連れて行かれた。

「あ～あ…こんな夜中に一体何のようなんだ？て、何かただ事じゃない顔をしてるな。」

今のシラヌイの表情を見ると、非常に険しい表情をしている。何か重要な事でも伝えたいのだろうか？それもソルに黙って、である。シラヌイは、腕を組みながらある事を話し始めた。

「ドルク。お前の力を見込んで頼みたい事がある。」

「頼みたい事？」

「ああ。…ソルを、見張っていてほしい。」

「見張る？監視でもしてくれってのか？」

突然、見張っていてくれなどと言われてすぐに「うん」と肯ける訳がない。それができたらストーカー認定されてもおかしくない。というかされてしまう。当然拒否をしたが、何故か頼むと懇願された。ここまで来ると、やはり何かあるに違いない。ソルの寝ている方向を向きながら、シラヌイはその理由を話し始めた。

「あいつは時と場合によっては、俺より怒りが激しい時がある。その時の怒りを治めるためのストッパー役と、母さんに関与している悪魔に極力接触させない障壁となってほしい。」
「関与している悪魔に接触させないように？…もし、接触しちまったら、あいつはどうなっちまうんだ？」
「……」

問いに対し、すぐに答えはしなかった。しばらくの沈黙が続いた後、静かに答えた。

「奴の悪魔が、キレる…」
「奴の悪魔って…あの狼の頭殻が着いた黒竜か？」

ドルクが知る中、ソルの悪魔は黒竜…魔狼フェンリルだけだ。だが…シラヌイは……。

「あれは奴の悪魔ではない。」
「なに！？」
「あれは、フェンリルはソルの悪魔ではない。奴はまだ寝ている。だから起こしてはいけない。そして、寝起きに発する【トリガーバースト】を絶対に発動させてはならない。」
「トリガーバースト？」

聞き返すと、シラヌイはトリガーバーストについて説明し始めた。

「トリガーバーストは魔人が悪魔化する時、悪魔が力を解放する時に生じる衝撃波だ。同時に、全能力中で個体によっては、威力だけなら最強を誇る技でもある。破壊規模は強者、弱者でもそれぞれ違うが、厄介なのはトリガーバーストが自分以外存在を全て障壁外へ弾き飛ばす事だ。すなわち、酸素、窒素、塵、あらゆる物質が凶器

になる。つまり、例えトリガーバーストの範囲外にいたとしても、今度はその余波としてあらゆる物質が襲い掛かってくる。破壊規模はいずれにしても広いのだ。」

「…厄介だな、トリガーバーストって。」

トリガーバーストの脅威がどれほどのものかが、これで分かった。だが、脅威はこれだけでは足らないらしく、補足説明も行った。

「あいつが内に宿す本体は、ソルにとってフェンリルより厄介だ。何せ魔人が宿す悪魔とは、自分自身も同然なのだからな。もしお互いが相成れないのであれば、殺し合いが起きる。そのために、お前に頼んでいる。」

「そういう事か…それなら、引き受けてやるぜ。」

「…助かる。」

（…兄として、これぐらいしかできないとはな……）

引き受けてくれた事には感謝していたが、どうも腑に落ちない。それは、自分が無力である事を悟ってしまっているからだ。これが自身の決めつけであればいいのだが…とも何度も思った。が、結局今の自分には、過去の事象を知らせる事しかできない。何もできない悔しさを噛み締めながら、ドルクとの会話を終え、朝を迎えた。

時間が経ち…昼、2時過ぎ。最初に降り立った場所に青色の魔法陣が浮かび上がっている。これが時空転移盤であるようだ。シラヌイとは名残惜しいが、別れる時が来た。

「あばよ、ちっとだけいいクソ兄。」

「クソは余計だ。」

小さな怒りを示したシラヌイが、しかめっ面をして睨めつけてきたが、ソルはイジらしく笑うだけで何の反応も示さなかった。一方、ドルクは内心でソルを止められるのだろうかと暗い気持ちになりがちだった。

「では、また何時か会おう。今度は数年後になるかもしれんがな。」

そう言った時、シラヌイは背を向けて神社へ戻ろうとした。

「…ソルを頼む。」

ソルにはよく聞こえなかったが、ドルクには聞こえた。「ああ。」と強く頷き、心を強く保った。その後、転移盤の上に乗り、消えていった。

「っと！あ～…ようやく戻って来たな。」
「だな。」
転移盤から降り立った時に眼に移ったものは、シラヌイに触れた直後の地点、そして、その時の時間であった。一日分の時間を過ごし、一秒も経ってないこの場に戻ってきたのだ。
「さてと、おつかいの続きと行こうか。」
そう言って歩き出した時、肩に誰かがぶつかった。
「イテッ。」
その瞬間、また景色が一変した。
「へ？」
「また！？」

出てきて早々、またもソルとドルクは誰かの空間内に引き摺りこまれた。今度の景色は、何というか、ソルのいる街と同じ造りの街だ。街灯の立つ街並み。コンクリートで立てられた先進国、現代のアメリカ建造物が漂う建物が立ち並ぶジャンク的な街。場所も、建物も、並び方も、ソルのＦＥＮＲＩＲ周辺とほぼそっくりだ。唯一違うと言えば、ＦＥＲＩＲであろう事務所が、『ＢＬＡＣＫ　ＳＯＵＬ』という建物に変わっている事だ。疑問符を浮かべている間に、ＢＬＡＣＫ　ＳＯＵＬ内から銃声が響き始めた。

「…あ？何だ？」

事務所の窓からこっそり中を覗いて見ると、赤と黒のコートを着込み、左手に黒い拳銃を握った、赤目で、ギザギザした黒い髪が印象的な『人間』が白い拳銃を口に咥えて不気味に笑い、黒い甲殻を纏った人型の怪物に向けて発砲を行っていた。甲殻の怪物がジャンプしたのを見た２０歳前後に見える若い青年は、右手に『ある物』を握って怪物を真っ二つに切り裂いた。

「…や、野郎……何で…『あれ』を！？」

絶句したのは、ソルだけでなく、ドルクもだった。何故なら、青年が手にしている『ある物』とは、

ソルだけが持っているはずの大剣、ダーインスレイブなのだからだ。

「ク、クロノス……必ず殺してやる…」

「ああ？戯言はおねんねしてから言いな。」

青年が残忍な笑みを浮かべた時、事務所内に甲殻の砕かれる音が響

いた。静寂の後、クロノスと呼ばれた青年は、デスクの上へ無造作に置かれた一枚のピザを口に放り込んで窓の外を見た。

『…で？何そこで見てんだ幻獣の亀と狼。』

赤い眼（なまこ）がギョロリと動き、こちらに向けられた。

ミッション11：リンボシティでの交差3～天使とは…そして　奴が現れた～

…若かりしクロノスの登場です。

クロノス（ＦＥＮＲＩＲ版）「おう、お前ら俺を知ってるか？ポケダン～波導悪魔～でも絶賛活動中のクロノスだ。何でここにいるかなんて野暮な事は考えるなや。」

ソル「こいつってあれだろ？ポケダンで絶賛悪役活動中の人間だろ？」

クロノス（ＦＥＮＲＩＲ版）「おいおい、ちょっとおふざけが過ぎるんじゃねえか？」

ソル「…なんか性格軽い気がするのは気のせいか？ＢＡＢＹ　ＹＥＡＨ！でもしそうな奴だなおい。」

ていうかこの時のこいつ、設定が色々アレだから。

ソル「アレってなんだよ？」

クロノス（ＦＥＮＲＩＲ版）「アレってのはアレだろ。」

ソル「分からん！」

…次回へ続く。

リンボシティでの交差４～だらしねえな、この男　サービス全開、バイオレンス

リンボシティ編４！

クロノス「始まるんだぜ！」

ソル「ＡＲＥ　ＹＯＵ　ＬＥＡＤＹ？」

ＧＯ！

「で？何そこで見てんだ幻獣の亀と狼。」

一度も姿を見られていないはずだが、彼に気づかれた。波導からも表情からも、攻撃意思が感じられる。

「おい、いきなり警戒心向けられると困るんだけどよ…」

「あのな、いきなり何もねえ所から現れて警戒しねえ奴なんかいるか？」

ドルクが弁解を求めるが、それに対し、至極尤もな反応をされた。それはそうだ。目の前や後ろから突然、何の前触れもなく現れたら警戒、攻撃意思を示すのは当たり前の事だ。

（なんか…シラヌイより面倒な奴に絡んじまったな……）

もしかしたら襲い掛かってくるかもしれない、と思ったソルは、VWを何時でも握れるよう、コートを少し寄せて手の付近に近づけた。

ジリリリリリ！

戦り合いが起きるかと思いきや、事務所のデスクに置かれた電話機がうるさく鳴った。

「あ、ちょっと待て。」

対面の相手を突然切り替え、クロノスはデスクへ行って受話器を取り、連絡相手の返事を待った。

「…よう、お疲れ！で、ギャラの話だが……なに？借金上乗せ…？……おいおいおいちょっと待てよ。それでも一応ギャラはあんだろ？1ドルくらい……え、なに？ちょっと待て！」

通話が切れ、電子音が鳴った。ちなみに、この時の通話を振り返ってみよう。

「よう、お疲れ！で、ギャラの話だが…」
［ええ、それなんだけどね？報酬は借金上乗せよ。］
「なに？借金上乗せ…？」
［そ、≪アビス≫の討伐報酬金は貰ったんだけど…今回あなたが壊した公衆電話の額が酷くてね、殆ど無いわよ？］
「おいおいおいちょっと待てよ。それでも一応ギャラはあんだろ？1ドルくらい。」
［ああギャラね？勿論前借金から引いとくわ♪］
「え、なに？ちょっと待て！」

プツン…ツーツーツー……

「クソ、あの女！」

怒りマークを浮かべて受話器を乱暴に置いた。

（うわ、ツイてね～…）
（こいつ間違いなく運ねえ奴だな……）

来客二人にも哀れに思われる始末。クロノスは首をぎこちなく動かして二人に振り向いた。

「おい、ちょっと言いたい事があるんだが…」

八つ当たりでもするかと思いきや、顔を引き攣らせて言いたい事を吐いた。

「俺、女運ねえんだわ…」

『……いや……知るかよ…（しるかよ…しるかよ…しるかよ……）』

気まずい空間に、一人の人間と二人（二匹）のポケモンの声が木霊した。

「あー…お前らが俺の敵じゃねえってのは分かった、ああ。」

あれから硬直が数分も続き、ようやく自分達が敵じゃないのを主張ができた。そんな訳で、和解はとりえあず成功した。しかし、話しの最中の彼、いや、奴の態度といったら堪ったものではない。「ほー。」や「へー。」などの曖昧な言葉で返し、アンティークチェアに座ってデスクに足を乗せ、ピザを食べながら聞くなど、「聞く気あんのか？」と罵声を浴びせたくなるほどの悪さだ。

（一年前のオレかこいつは！）

過去の姿を思い出し、毒突くほどソルは、ストレス値が速くも爆発しそうになった。聞けばこの男、ソルと同じで便利屋、兼デビルハ

ンターを営んでいるようだが、あまりにもだらしなくて向いてなさ過ぎる。おまけに見かけ通りの面倒臭がり屋ときた。やる事が何にしても物を投げる、対象を足で絡めて取る、仕舞いにはスロットコインを某レールガン少女の如く、コーヒードリップにヒットさせてコーヒーをピタゴラスイッチ要領で淹れるという「ある意味」尊敬できる神技をやってのけた。それでどうやって数メートル離れてる状態で取るかというと、普通に歩いて取りに行った。

『普通にやれよ！回りくどい！』

そこだけ普通に取りに行くんかい！ツッコミ精神全開でコンビ芸人と化したポケモン組が声を上げた。それに対しクロノスは、

「ヤだね、手でボタン操作なんざ面倒臭え。」

などという倦怠オーラ全開で言い放った。

『末期だ！こいつ末期状態だ！』

驚くほどシンクロが続くソルとドルク。この三人の組み合わせは、他所から見ればもはや漫才芸人にしか観えなくなってきた。クロノス、「ある意味」恐ろしい人間だ。クロノスはコーヒーを一気に口に流し込むが、これだけじゃ足らずにソル達の話を放ったらかしにし、デスクに戻って受話器を手に取り、デリバリーサービスを注文し出した。

「よう、俺だ俺。……ああ？俺俺詐欺？おいおい、冗談はよせよ。……あ、ちょっ待て、切るな、マジで切らんで、マジで。それよりベーコン&ブラックペッパーのピザにチョコレートとストロベリーのサンデー2種を頼みたいんだが。……まあそう心配

するな、『近い内に纏めて払ってやるさ。』……おお、頼んだぜえ。じゃあな。」
「おい、『近い内に纏めて払ってやるさ。』って、お前払う気ねえだろ…」

死語とほぼ同等の意味を持つ「近い内に～」を平然と言ったクロノスに、ドルクが呆れて目を濁らせた。

「んな細かい事気にするなよ、幻獣の亀。」
「俺はドルクだって言ってんだろうが！」
「はいはい、ドルク様。」
「様を付けんな！皮肉にしか聞こえねえよ！」

（……やってらんねー……）

二人の口喧嘩を傍らで見ているソルは、死んだ魚の目をして頬杖をついた。こんな所にオレとほぼ同じ存在がいるとは……。ストロベリーサンデー略して【ストサン】除く『注文メニュー』が自分と全く同じ、服装と武装も全く同じ…しかも自分しか持っていないはずのダーインスレイブを手にしており、性格の一部が一昔前の自分と似ている。さらに奴は発言していないものの、体に悪魔を宿して波導もほぼ同じ人間の魔人』、いや…これはもはや似ているというよりも、『全く同じ自分という存在』のような人物だ。よく自分と同じ奴と対峙すると面倒な事になるというのがあるが、まったくその通りである。ナニからナニまでそっくりとは……

「ただいま帰ったわよ～。」

不穏な（濁った）空気が流れるこの現場に、再び狂い風が吹き荒れた。若い女性の声が玄関の扉越しから響いてきた途端に扉が蹴り飛

ばされ、クロノスに直撃した。

「げっ…ライラ……」

「あんた、あたしから逃げられるとでも思ってるの？」

扉を押しのけたクロノスへ、意地悪い笑みを浮かべるライラと呼ばれたその女性は、トパーズのような金髪に真紅の瞳、クロノスと呼応をするかのような赤いコートを身に包み、青黒い靴を履いた姿をしている。歳はクロノスとあまり差が無さそうで、精々１０代後半か、２０代前半だ。しかし、そういう歳に見えるのはそのコートによるものであって、実際は女性と呼ぶよりは少女の方が正しいかもしれない。幼さがまだ浮かぶ上、背は１６２ｃｍのソルとほぼ同等であるから尚更だ。

（…あ？こいつ、純粋の悪魔じゃねえか…おまけに、なんか心なしかお袋に似てる気が……）

ライラの姿を視認したソルは、何故か彼女が母、アルテミシアに似ているように見えた。髪の明るさ具合は少し違うが、金髪、赤目、顔立ち、鮮血のように赤い服装。目はアルテミシアの場合、青が混じっていたが、それを除くとよく似ている。もしかしたら血縁者かもしれないとも思ったが…そんなはず無いか、と考えるのを止めた。

「さっきラディスから聞いたわよ。あんた、またピザとサンデーを頼んだのね？いい加減食生活改めなさいよ。」

「うるせえなあ。俺は・魔人だから・いくら・食っても・太らんし・病気にならんし・簡単には死なー―ブへ！」

「ハイ説教決定ー♪」

裁判長ライラに被告人クロノスが抗議を起こしたが、裁判長から超

高速のソバットキックを顔面に受けた。しかもダーインスレイブの胴体串刺しサービス付きで、だ。（ある意味で）サービス精神全開である、このバイオレンス女。デスクから身を投げ出されたクロノスは、そのまま壁に激突した。事務所が軽く揺れた気がした。たぶん、造りも脆いのだろう。ソバットキックを御見舞いしたライラが、ソルとドルクをチラッと見て含みのある笑みを浮かべた。

「あんた達、面白い幻獣ね。」
「…？」
「面白い？」

それだけ言い残した彼女は、すぐさまクロノスの所へ早足で行った。グッタリとしている奴の首を掴もうとしたが、腹を刺され、出血もして致命傷のはずなのに、平然として黒い拳銃の銃口を突きつけられ、手を止めた。まあ、クロノスが平然としているのは、この男が魔人であるからなのだろう。尤も、よほど強くない限り、あれで死ぬのが普通なのだが…

「お前なあ…もうちょっと手加減しろよ。」
「手加減？そんな必要無いじゃない、あんたには。ねえ、ピザンデー男？」
「……ＯＫ。ならイカレたパーティーを始めようじゃねえか！」

ジャキ！！

ライラが一定の距離を取った瞬間、２ペアの二丁拳銃が室内に現れ

た。１ペアはクロノスの持つ白と黒の拳銃。対し、もう１ペアの二丁拳銃、ライラのは青と赤の派手な拳銃。さて、この４つの拳銃は二人にピッタリと狙いが定められている。そこで問題だ。この行為は何に値する？適切な言葉を答えよ。

「おいおい……いきなり撃ち合いかよ…」
「つーかなんて奴らだ……」

［撃ち合い］△。答えは［殺り合い］。

「お客さんは外に出てな。ここから先はＲ指定だ。」

クロノスの言葉で幻獣＝ポケモン二人は一端外に出され、直後に室内から幾万の銃声と金属音、破壊音が鳴り響いた。

「……ドルク。」
「ん～…？」
「オレの世界ってさー…」
「あ～…」
「ロクな奴いねえなー……」
「そうだな～……」

意気消沈。もうこれしか言い表せない。

このイカレた世界め……

『クロノス　恒例行事回数：1』

リンボシティでの交差４～だらしねえな、この男　サービス全開、バイオレンス

ソル「ＦＥＮＲＩＲのクロノスはポケダンとかなり違うな。」

日常で串刺しに遭って不幸屋でピザ野郎で皮肉屋で借金あって女運無くてと色々不遇な立ち位置だから！

クロノス（ＦＥＮＲＩＲ版）「性格違うってのは触れねえのかよ。」

あ、忘れてた。

クロノス「テメエも恒例行事やろうな？」

ズン！

げばら！？『作者　恒例行事数：１』

また今回新キャラのライラ。彼女もまたクロノスと同じキーパーソンなのです。

ライラ「作者ーあたしについては次回で頼むわよー。」

…ま、今日は書くの疲れたし、これでいいか。

キーパーソン紹介

１　クロノス：どこぞのデビルハンターが如く、事あるごとに串刺

しに遭い、借金を乗せられる不幸なデビルハンター。しかし、それだけ修羅場を抜けてきたが為に、魔人＝悪魔の力を使わずとも悪魔を倒せる実力者。ソルと波導がほぼ同じであり、性格面、行動面等、似ている所が多々ある。何かソルと関係性が高いと思われる人物。

追記：恒例行事とは？

串刺しの事。

詳しい内容はデビルメイクライ参照。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1735v/

REVENGE OF THE FENRIR

2011年12月14日21時49分発行